

戦前戦後を越える思想

——政論家としての胡蘭成——

関 智 英

一 はじめに

本稿の目的は、日中戦争時期に宣伝部次長等として汪精衛政権に参画し、戦後は日本に滞在した胡蘭成について、主に政論家としての側面からその活動を明らかにすることである。後述するように胡蘭成研究は、張愛玲との関係やその独特の文体・思想に注目したものが主流を成し、すでに豊富な成果がある。しかし、筆者は当時複数の人が胡蘭成を一義的には政論家と理解していた点を看過すべきでないと考え（1）。例えば一九四三年に南京で胡蘭成に面会した作家高見順は、胡蘭成を、「政治家」と見ていた他（2）、同時代の中国にも同様の評価が確認される（3）。

政論家の側面に注目して胡蘭成の戦前戦後の主張を検討すると、胡の取り上げた表面上のテーマや関心は時に変化するものの、政治や社会の問題を論議し続けたという点では一貫性が見られる。そこへの着目から、本稿では胡蘭成の日本軍占領地（以下占領地）での議論の志向が、表面上の変容を伴いながらも戦後にも継続される側面があったことを明らかに

したい。またそこから、戦後日本に亡命した他の対日協力政権関係者の動向との相違点も明らかにできよう（4）。

二 胡蘭成について

1 先行研究——二つの流れ

胡蘭成に関する研究は一九九〇年代から盛んになってきたが、その背景には大きく二つの潮流がある。一つは、作家張愛玲に対する関心の高まりである。張愛玲は一九四〇年代の上海を舞台に優れた作品を残した作家だが、中華人民共和国建国直後にアメリカに亡命したことからその作品は長らく中国では取り上げられることがなかった。その張愛玲が一九六〇年代以降に近代中国文学研究で再評価されたことに伴い、張と一時期婚姻関係にあった胡蘭成への関心もまた高まったのである。自らは回想録の類をほとんど残さなかった張愛玲を研究する上で、胡蘭成の回想録は無視することのできない存在である。二つには、台湾文学の世界での関心の高まりである。一九七〇年代の一時期、胡蘭成は台湾に滞在したが（年表参照）、その際邂逅した作家朱西寧とその娘朱天文・朱

天心が胡蘭成を文学的な見地から高く評価したのである。

こうした関心の高まりを背景に胡蘭成に関する事実関係は整理されつつあり、評伝も編まれた⁽⁵⁾。本稿に関わる観点に絞っても、王徳威が胡蘭成の著作が日本の右翼の好感を得ていた点を指摘し⁽⁶⁾、黄錦樹は過度な胡蘭成に対する評価を批判している⁽⁷⁾。しかし、多くの研究は史料的な制約もあり、胡蘭成の活動の一時期を取り上げるにとどまっている。またその関心も文体や思想、張愛玲との関係に集まっている⁽⁸⁾。

こうした中、胡蘭成の日本での活動に注目した金文京・濱田麻矢の問題関心は、本稿とも重なる。金は、朱西寧・朱天文・朱天心等が胡蘭成の学説を抛りどころに三三集団を組織するなど、胡蘭成が台湾文学界に与えた影響や、胡蘭成と日本の浪漫派文学との関係を明らかにした⁽⁹⁾。また金・濱田は、保田与重郎との関係を中心に戦後の胡蘭成の歩みを整理した他、胡蘭成の日本語の味わいや、高見順・竹内好の胡蘭成評「野にある文人」についても検討した。そして胡蘭成が中国で評価されなかった原因は、汪政権に参加したという政治的過去だけではなく、業界を越えた交遊の幅広さと、ジャンルを超えた著述の奔放さが、無節操・無責任という印象を与えたためとする⁽¹⁰⁾。

本稿では以上の問題意識を引き継ぎ、一見散漫にも見える胡蘭成の言論活動は、政論家としては実は一貫性があり、それは戦前と戦後と継続するものであった点を明らかにしたい。具体的には、占領地の雑誌・新聞で胡が発表した議論の

他、従来明らかにされてこなかった戦前の『中華日報』及び戦後日本での議論について広く検討する。

2 胡蘭成略歴

胡蘭成は議論を検討する前に、その略歴を簡単に纏めておく⁽¹¹⁾。胡蘭成は一九〇六年二月浙江省嵊県に生まれた。杭州の中学校を四年次に退学した後は、浙江・広西の小学校・英文専修学校・師範学校で教壇に立ち、この間、一九二六年には燕京大学副校長室で事務を担当する傍ら講義を聴講した。

胡蘭成に転機が訪れたのは一九三七年に知人の紹介で、国民党汪精衛派の機関紙『中華日報』主筆になったことである。それまで地方紙に関わった経験はあったものの、地方で一介の教員に過ぎなかった胡蘭成が、一躍中央で活躍する機会を得たのである。ここで胡蘭成は経済問題・国際情勢について評論を立て続けに発表した(論文一覽参照)。さらに日中戦争が勃発すると香港の『南華日報』(『中華日報』の姉妹紙)総主筆となり、『流沙』の筆名で社論を執筆し、和平運動を始めていた汪精衛グループに加わった。

一九三九年上海に移った胡蘭成は『中華日報』総主筆となり、一九四〇年三月に汪政権が成立すると宣伝部次長に就任した。しかし汪政権成立後、胡蘭成は徐々に政権から距離をとった。一九四〇年夏に『中華日報』を辞めた胡蘭成は、翌年創刊された『国民新聞』総主筆に就任するが、そこでの筆禍により宣伝部次長を辞任している。その後は行政院法制局

長として政権内に留まるが、対米英参戦を巡って汪精衛と意見が対立し、一九四三年末には「日本帝国主義必敗、南京政府覆滅、国民会議召集」などの議論により逮捕投獄された。この際、胡蘭成の釈放に尽力したのが池田篤紀ら駐南京日本大使館の外交官や軍人であった。

一九四四年に釈放された胡蘭成は、上海を経て湖北に移り、新聞『大楚報』の経営に携わった。ちなみに胡蘭成と張愛玲との出会いは上海滞在中の一九四四年二月で、二人は同年四月に結婚し、一月には共同で雑誌『苦竹』を創刊している。

日本の敗戦後、胡蘭成は重慶（国民党）からも延安（共産党）からも独立した第三極をめざし、鄒平凡（汪政権陸軍上將）らと武漢独立を宣言したが、二週間で失敗した¹²。その後胡蘭成は浙江温州に潜伏した。一九四九年一〇月に人民共和國が成立すると、梁漱溟の招きで北京行を検討するも、最終的には香港を経由して、一九五〇年九月日本に亡命した。

日本での胡蘭成は清水重三や池田篤紀ら旧知の日本人の助けを得ながら、各種新聞・雑誌で自身の見解を披瀝した。保田与重郎ら保守系文化人との交流も知られており、神道系の団体である筑波山海田開拓延を舞台に学校設立をも構想した。一九八一年七月二五日、胡蘭成は東京福生で逝去したが、葬儀には福田超夫ら政治家も参列している。

三 中国での議論

1 「胡蘭亭」と「蘭」——停刊前『中華日報』での議論

これまでも胡蘭成が一九三七年四月に中華日報社に入り、文章を執筆したことは知られていたが、その具体的な内容は不明だった。これには従来記者としての胡蘭成に関心が向けられてこなかったこと、また当時胡蘭成が、執筆に際して「胡蘭成」を用いていなかったことが影響しているよう。しかし、当該時期の『中華日報』を調べると、一九三七年四月から突然紙面で評論を展開し始める「胡蘭亭」及び筆名「蘭」なる人物を見つけることができる。

「胡蘭亭」「蘭」署名記事の内容は、経済・国際問題を扱ったものが多いが、これは同時期『中華日報』で経済・国際問題について記事を発表していたという胡蘭成の回想と符合する。また「胡蘭亭」の「蘭亭」は紹興を想起させるが、胡蘭成の出身地嵊県は広義には紹興に含まれる。以上から判断して、「胡蘭亭」及び「蘭」は胡蘭成の筆名と考えられる。

一九三七年四月一日の「対経済建設貢献一点意見」から一九三七年一〇月三一日「再論九国公約会議——調停暴走不通之路！」までに書かれた署名記事は合計で五八篇確認でき、そのうち五二篇が『中華日報』に掲載されている。そのほか二篇が『中国世界经济情報』に、四篇が『中華月報』（『中華日報』の姉妹雑誌）に掲載されている。

この時期胡蘭成は平均して四日に一篇の割合で『中華日報』に評論を掲載し、その内容は経済建設や世界情勢への幅広い関心をうかがわせるものとなっている。例えば経済建設については「国家資本を中心とした経済建設は、民主政治と

結合したものでなければならず〔中略〕民主主義と符合した計画経済は、民主的な方法を用いてはじめて生まれる〔13〕と論じている。また日中関係については「日英談判がもし中国の主権を侵すことがあれば、中日の経済協力は不可能である〔中略〕東北の失地〔満洲国〕が恢復されなければ、中日親善の障碍も取り除けないし、またもし〔日本の〕対華外交が明朗化できなければ、日本国内の政治及び経済的危機は結局解決できず、極東和平の障碍も取り除けない〔14〕とする。ただこの時期には、後の胡蘭成の議論に見られるような独自の見解は打ち出されておらず、その内容も基本的には国民党汪精衛派の議論に沿ったものであった。

まもなく日中戦争が勃発すると一九三七年一月二十九日付を最後に『中華日報』は停刊した〔15〕。胡蘭成も香港の『南華日報』に活動の舞台を移した。

2 陳璧君の激賞——和平運動への参加と『中華日報』総主筆

一九三八年一月、汪精衛は重慶を脱し日本との和平を声明し、和平運動を開始した〔16〕。胡蘭成が和平運動に参加する経緯はその回想で次のように述べられている。

汪精衛が重慶を出て間もなく、汪夫人（陳璧君女史）が香港に来られ、当時汪精衛系の南華日報主筆であった私を招き、和平運動の主旨を説明され、私の参加を勧められた。私はお断りした〔中略〕夫人は「私は娘の時、父の全財産を革命に捧げました。汪先生は肅親王襲撃の時と塘沽協定のために兇弾に打たれた時と二度にわたって

既に生命を国の為に犠牲にしました。なお、その上犠牲にでき得るものといえば、名譽だけが残っています。汪先生と私はいまそれを国に捧げます。貴方は名譽を最高とするのですか」といわれた〔中略〕私は汪精衛が名譽までいけにえにして国に捧げなさるお考えに心の底まで打たれた。私は翌日、香港の山上に登り、海と空を眺め、その偉大さを見、古今の悠々たる時の流れを感じて、すべてを国に捧げようと決心した〔17〕。

「名譽を国に捧げる」「海と空を眺め、その偉大さを見」「古今の悠々たる時の流れをかんじて」といった部分は、胡蘭成の気概の表れであると同時に、自らの行動を浪漫的に語る胡蘭成の傾向が表れている。

和平運動に加わった胡蘭成は『中華日報』の復刊を期にその総主筆に就任した。復刊した『中華日報』社員には汪精衛が国民党青年部長を担当していた頃（一九二四年頃）の青年部員が多く、社長の林柏生も広州の嶺南大学卒業生だった〔18〕。そうした中、それまで汪精衛や国民党とは縁もゆかりもなかった胡蘭成が総主筆に就任したのは異例であった。

これには、胡蘭成が『南華日報』に掲載した「戦難、和亦不易（戦いは困難だが、和平もまた簡単ではない）」を激賞し、胡を汪精衛に推薦した陳璧君の後ろ盾が大きかったと考えられる。陳璧君は、宣伝部部長林柏生は「汪先生側の人」であるのに対し、同次長の胡蘭成は自分の側の人であると意識しており、胡蘭成にも「自分を姉と思へ、自分も姉だけのことは出来ると思ふから」と語ったという〔19〕。

『中華日報』は復刊に際し新たに「社評」欄を設けたが、復刊から半年弱の間に胡蘭成が執筆した社評は確認できるものに限っても八一篇で、これは全体の五六%にものぼる。胡蘭成は平均して二日に一度以上の割合で社評を執筆していたことになる⁽²⁰⁾。社評の内容は汪派国民党の和平運動に沿ったものだったが、同時期の座談会での発言には、日本にも主張すべきは主張する胡蘭成の意気が現われている。

私達は祖国が何等の道義的根拠なくして押しつけられてきた「平等条約」の排除の為に戦はねばならないのです。これが建国にとつて、第一義的な外交闘争です。しかし、不平等条約は日本からも押しつけられてゐるので「中略」国家の権威を毅然として保全しながら、よりよき機会を待つ、かう云つた外交闘争を今日の支那は戦ふことが、最も聡明な方向であり、手段であると考えてをります⁽²¹⁾。

3 政権からの乖離——汪精衛との齟齬

一九四〇年三月、汪精衛が首都を重慶から南京に戻すという体裁（還都）で政権を樹立すると、胡蘭成は宣伝部次長として政権に参画した。胡蘭成は宣伝部の仕事はほとんどしなかったと回想しているが、宣伝部傘下の宣伝講習処では講義を担当していた。他の講師の授業には関心を示さなかった字員たちも、「唯一人胡蘭成の授業だけは、誰もが注意して聞き、少しもおろそかにすることがなかった」という⁽²²⁾。

しかし汪政権発足から間もなく胡蘭成は汪政権と距離をと

るようになり、一九四〇年夏には『中華日報』を離れ、翌年二月には創刊された『国民新聞』の総主筆に就任した。胡蘭成によれば汪精衛との隔たりは、以下のように主に三つの段階を経て徐々に深まったという⁽²³⁾。

一つには日中戦争の理解を巡る汪精衛との見解の相違である。胡蘭成は「中国は決して、戦に負けてはゐない」という立場にあったが、汪精衛は「大アジア主義を主張することによつて、日本側を譲歩させ、中国の敗戦の事実を軽減しよう」とするに過ぎなかった。

日中戦争の勝敗の評価は、占領地の中国人の立場を考える際の指標となる。胡蘭成の主張は、汪政権成立前後の時期に和平運動を支援するため、袁殊が組織した興亜建国運動（興建運動）の主張に近い。興建運動は、近衛声明の和平の主張に意義があると認めたものの、日中戦争で中国は日本に負けただけではないとの立場を堅持し、仮に日本が声明の内容を違えるならば、いつでも抗戦に戻ることを表明していた⁽²⁴⁾。胡蘭成もこうした同会の運動方針に共鳴していたと思われ、興建運動の機関誌にも文章を寄せている⁽²⁵⁾。

二つには李士群との対立である。李士群は特務工作を通して汪政権で頭角を現し、清郷工作でも中心的役割を果たした人物である。胡蘭成は、日本軍の全面撤兵のために、まず地区毎に、順次日本軍に代わって中国軍を駐屯させることを汪精衛に建議したものの、「これが料^{はか}らずも清郷工作といふ形に変わってしまった」ことを問題視していた。

清郷工作は一定区画を竹矢来などで囲んで、人と物資の移

動を政府の管理下に置き、区域内から重慶国民党や共産党の影響力を排除する政策で、実施にあたっては日本の軍事力に頼る側面があった。このため、日本軍の全面撤兵は実現から遠のいたのである。

三つには、対英米宣戦布告を巡る汪精衛との対立である。一九四三年一月九日、日本の対英米宣戦布告から一年を経て、汪政権も宣戦を布告したが、胡蘭成はこれに反対していた。さらに胡蘭成が「日本帝国主義者は必ず敗れ、汪政府は必ず転覆する、これを救ふには、中国が国民会議を開き、日本が昭和維新を断行する以外に、途はない」という内容の文章を発表したため、「汪先生も怒つて、私（胡蘭成）を獄に下し、私を殺さうとした」のである。こうして胡蘭成は汪政権を離れることになった。

4 「全面和平に到る道」と日本人との交流

胡蘭成が政権を離れる事態を招来した直接の原因は、胡蘭成が一九四三年十月三日に南京の『民国日報』に発表した「到全面和平之路」という文章にあった。この中で胡蘭成は、局部和平から全面和平に到るのは、還都以来皆の信念だが、もしそれが局部和平の段階で止まってしまうと、和平とは言えないのだから、速やかに中国は帝国主義戦争から抜け出す必要があるとした。また、和平地区と抗戦地区とが隔絶した現状を打開するために、中国民衆による革命勢力樹立を訴え、重慶政府の方針転換を促すことの必要性を説いた。そして人民の意志と力で重慶を支配するためには、まず和平地区

の政治が人民の監督を受け入れるべきであり、重慶側人民の言論結社の自由をうながすにも、まず和平地区の人民が言論結社の自由を持つべきであると主張した⁽²⁶⁾。これは重慶国民政府への批判であると同時に、汪政権に対しても正面から要求を突き付けるものだった。

この文章は池田篤紀ら駐南京日本大使館の関係者にも衝戦を与えた。一読した池田は「斯かる参戦拒否の言をなす者ありとは怪しからん」と思い、胡蘭成に「早速会談を申込んだ」ところが両者は話すうちに、「大いに共鳴しかつ相互に敬愛の情」を抱き、「それから時々往来」する仲になったという。そして池田の依頼で胡蘭成が「書き上げてくれた論策が、〔汪政権〕当局の忌諱に触れて筆禍事件を惹起し、胡君は二月程監禁されてしまった」のであった⁽²⁷⁾。

四八日間を獄中で過ごした胡蘭成は、大使館の池田篤紀・清水董三（参事官）・谷正之（駐華大使）・三品隆以（南京総司令部報道部長）らの尽力で釈放された。その後、胡蘭成は漢口へ移って沈啓无・関永吉らと新聞『大楚報』の経営に携わり、同紙を舞台に言論活動を継続した。

汪政権に対する胡蘭成の意識は、当時胡が主宰した雑誌『苦竹』が北一輝の『支那革命外史』を記載したことからもうかがえる⁽²⁸⁾。伏字ではあるものの宋教仁暗殺の真犯人を孫中山とする『支那革命外史』を翻訳することは、孫中山の大アジア主義に正統性を求めた汪政権との決別を意味しよう。

ただ汪精衛と日本に対する胡蘭成の思いは複雑だった。後

年胡蘭成は「私は汪先生が日本に対して、あまりにも感情的なのに不満で、ついに〔汪政権より〕遠ざかることになったが、その後、日本人と直〔接〕接するようになってから、またその〔日本人の〕純情に感激して、日本の敗戦近しとあきらかに知りながらも、その敗れざらんことを望んだ」と回想している(29)。

汪政権から離れた胡蘭成はさらに独自の中国将来像を語るようになった。その骨子は人民による国民会議を召集し、それからなる革命政府により、日中の和平を目指すというものであった。

唯一ツ国民会議の召集のみが、戦後の局面收拾の能力をもつ〔中略〕重慶のそして延安の人民に連絡をとるべきであらう。中国戦時人民委員会は即ち抗戦区と和平区の人民を打つて一丸と為し国民会議を召集し、自らの意志と能力を以て南京政府重慶政府延安政府の解決し得ざる問題を解決する。この中より統一革命政府を生み出して〔中略〕歴史的任務を完成する。斯かる深刻にしてかつ広大なる工作を通じてのみ中日戦争は早目に片づけられ、日本と中国は提携して更に一層高い段階における「アジア」解放の対米英闘争に立ち向ひ得るのだ(30)。

こうした胡蘭成の議論に日本側関係者も関心を持ち続けた。一九四五年二月に駐南京満洲国大使館に参事官として赴任した竹之内安巳は、胡蘭成の「論説は筆鋒するどく日中問題にメスを振っていたので私達は彼の社説を読むのが日課になっていたほど感銘を覚えたものだった。(駐華満洲国公使

の) 中山〔優〕さんと私は胡氏を相手に官邸の庭にテーブルをもち出し、老酒をのみ、炒麵をつつきながら時局について歓談した」と回想している(31)。

この頃、胡蘭成は池田に対し、長年自分は「如何にしてダーウインとマルクスと梁漱溟を超越するか」を課題としており、とりわけ「梁漱溟を乗り越えることが一番最後迄残った課題であつたが、近來やうやく自信をもつに至つた」と語っていたという(32)。こうした自らの思いを率直に表明する態度や、単なる時事的情勢分析にとどまらない議論の妙も日本人の中に支持者を得た一因だろう。

5 日本の解放と世界の解放——日本の敗戦と潜伏

日本の敗戦前夜の事情は、胡蘭成の次の回想が簡にして要を得ているので引用しよう。

私は池田君と共に、終戦の間近に迫つて居るのを予想したが、時代は如何にも重大であり、局面は如何にも貧弱だつたので、一年半の間に、どうしても軍隊を作らうと考へたところが準備半ばにして、日本の降伏となり、已むなく他人の軍隊を借りて旗挙げをしたが、二週間武漢独立をやつたゞけで、結局皆の氣持が揃はず、私は単身亡命するに至つたのである。私は去るに臨んで、書類を全部焼き捨てた(33)。

胡蘭成が潜伏する直前に日本人に残した文章が残されている。この中で胡蘭成は、自信を持っていることは日本人の長所で、「戦敗後は特に此の民族的自信は昂揚されねばならな

い」としながらも、一方で、日本人が驕慢であるが故に、世界を丁重に扱わなくなった点を問題視した。続いて、日本人が「戦争中に於て物力を超へた精神力を発揮したのは事実〔中略〕」だが此の種の精神力の發揮は極めて極限されたもので、「肝要なことは、如何にして人々を革命の水準に迄昂めるかであり」、これは「決して一国家のことではなく〔中略〕世界革命の課題で〔中略〕日本が此の点に深く覚醒せんことを希望」した。そして日本の将来について留保をつけながらも次のように予言した。

日本の敗戦による束縛は、凡そ五年にして解放されるであらう。日本の産業が戦前の水準に迄恢復するには凡そ十五年は要するものと思はれる。だが之れには日本の解放は決して日本一国の努力によつて到達されるものではなく、今後の世界情勢の機動の中に於てのみ其の機会が恵まれることを銘記せねばならぬ(34)。

この後胡蘭成は張嘉儀の変名で中学教師として浙江省温州に潜伏した。潜伏中には雑誌『觀察』が機縁となつて中国民主同盟秘書長だつた梁漱溟と知己になり、北京に招請された。しかし素性が露見するのを恐れた胡蘭成は香港へ逃れた(35)。香港では哲学者の唐君毅と面識を持った他、樊仲雲(汪政權時代の中央大学学長)や呉四宝(特工総部警衛総隊副総隊長)の未亡人余愛珍とも会っている。のちに余と胡蘭成は日本で結婚することになる。

潜伏中の胡蘭成は、台湾の蒋介石に対して「中国新生運動計画草案」なるものを送付している。この中では三年以内に

第三次世界大戦が勃発するとの予測の下、国際的な反共志願軍を組織し、台湾の精鋭二個師団を江蘇・浙江から上陸させること、また日本で有志を教育する学校を開くことなどが提案され、ソ連・米国の他いかなる列強にも中国の命運をまかせず、自主外交を打ち立てるべきことなどが唱えられている(36)。

中華人民共和国成立前後、東アジアの情勢がまだ流動的な中、反共を軸に地域構想を語る議論は胡蘭成に限られるものではなかった。日本・韓国・中華民国による「日韓蔣同盟」や反共国家による「アジア聯盟」、さらに「アジアマーシャルプラン」といった構想はその一例である(37)。胡蘭成の提案は採用されることはなかったが、当局の一定の注意はひいていたようで、その後も胡の動向は中華民国当局に報告されていた(38)。

四 日本亡命後の議論

一九五〇年の中秋の晩、胡蘭成は突如東京荻窪の清水董三の私邸に現れた(39)。胡はイギリス船の下級船員に身をやつし、香港から日本に入国したのである(40)。その後胡蘭成は一九八一年に死去するまで、一時的な台湾滞在を除き、三十年にわたつて日本で暮らした。

その間に胡蘭成が発表した著作以外の論稿は、筆者が確認できたものだけで二二〇篇を超える(論文一覧参照)。これらの議論については、ほとんどが『東三新聞』『ジャーナル』『教育日本新聞』といった地方新聞や業界紙に掲載されたこ

ともあり、従来その内容はほとんど知られてこなかった。しかしこうした議論を整理分析することで、胡蘭成が戦後の日本でも戦前と同様に世界情勢について関心を持ち続け、自身の立場を披歴していたことが明らかになった。

1 朝鮮戦争と第三次世界大戦

日本に到着して間もない胡蘭成に執筆の場を提供したのは、『毎日新聞』編集長の橘善守⁴¹⁾である。橘は戦前から天津・上海支局長などを務めた中国事情に通じた記者だった⁴²⁾。胡蘭成は一九五〇年一月と翌年元旦の『毎日新聞』に、それぞれ朝鮮戦争とアジアの東西対立に関する「特別寄稿」を寄せ、一九五三年元旦にはサンフランシスコ平和条約締結後の「日本に対する中共の腹案」を分析してみせた⁴³⁾。また同社刊行の『毎日情報』も二回にわたり、日本が独立した国家たるべく軍備再建をするべき、といった胡の記事を載せている⁴⁴⁾。

これに続くように『改造』が「毛沢東論」（一九五一年三月）と「日本の風物」（一九五二年二月）、『文藝春秋』が「中国のこころ」（一九五二年八月）、『東洋経済新報』が「中国人は中共をどうみる」（一九五一年六月）と「アジアと日本」（同）、『日本及日本人』が「わが日共観」（一九五二年八月）と、一九五一年から翌年にかけて複数の総合雑誌も胡蘭成の議論を取り上げた。

この時期の胡蘭成の議論は、第三次世界大戦の勃発が近いことや、中国の民間で新しい政治運動が起ることを前提とし

て立論されたものであった。さらに胡はそれを踏まえて日中合作を説き、一九五一年に執筆した「日本の大道」では、「我々のアジア建設方案は、中日合作を主内容」とし、「中国の大地と人力、日本の技術、米国の資本」による中国の共同開発を提起した。また「中日合作は中共打倒を前提とする」とし、「最も重要なのは、日本が直接に中国民間の革命志士を援助すること」で、日本も「中国人民に関心を持つべき」と述べている⁴⁵⁾。

朝鮮戦争の帰趨が定まらず、中国を含め東アジア情勢がまだまだ流動的と見られ、また中国からの情報が限られていた当時の日本にあつて、胡蘭成が最近まで大陸に滞在していた新来の亡命者であつたことや、「中国でも有名な国際問題評論家⁴⁶⁾」といった触れ込みは、人々の注目を惹いたことは確かだろう。

例えば日本の国際社会復帰が具体的日程に上る中、一九五一年元旦に発表された以下の議論で胡蘭成は、アメリカの占領により日本が「一面頹廢の傾向を示しはじめている」とし、その再武装も「ただ米国の指図を待っているわけには行かない」と鋭く指摘する。かつて日本の占領下中国で「国家の権威を毅然として保全しながら、よりよき機会を待つ」と発言し⁴⁷⁾、国の独立と自主にこだわった胡蘭成ならではの視点とも読め、興味深いものがある。

占領はすでに五年を経過している。占領軍の美德は早くもその歴史的役割を果たした。日本の政府と国民は長期の占領によって、一面頹廢の傾向を示しはじめている。し

かし一方同時にまた日に増し險悪化する世界情勢によって覚醒を促がされつつある〔中略〕ただ五年來というものの日本民族は少しも口をきかなかつた〔中略〕だから今日から日本人は大いに語るべきである。一九五一年の中に、日本は国民外交を実現し得る可能性に恵まれている。政府と協力し、早期にしてまた好ましい平和条約を希求してよい。日本の一切はその国家の独立自主を前提とする〔中略〕再武装の程度と性格は、やはり主として日本自身で決定せねばならぬことであつて、ただ米国の指図を待つてゐるわけには行かない〔中略〕将来世界的奴隸制の維持のために戦われるか、それとも人類の理想のために自ら決意して戦うかは、日本民族の自ら決定し得るところである(48)。

しかし全国規模の主要メディアが胡蘭成の議論を取り上げたのは一九五三年初頭までであつた。これは一九五三年七月に朝鮮戦争が休戦し、世界戦争の危機がひとまず回避されたことによる。直截に言えば胡蘭成の予言は外れたのである。また池田篤紀によれば、この頃胡蘭成が中国語で自身の文明観・世界観を綴つて出版した『山河歲月』に対する反響も芳しくなかつた。

本書ハ胡蘭成君畢生ノ作也。但書肆ノ出版ヲ肯フ者無シ。不得止余カ郷里ニ於テ一千部ヲ印行シ二百部ヲ香港ニ送ル。台湾ハ拒否シテ不受。香港ニ於テモ殆ド購フ者無キ様子也。胡君ハ本書ニ於テ中国文化ノ特色ヲ發揮シ其ノ民族的自覺ヲ促サント志シタルモノナルモ知己ヲ後

世ニ待ツノ歎ヲ如何トモスル無キハ真ニ可憐ナリ(49)。こうした事情を反映してか、ほぼ二年間胡蘭成の時局に対する発言は確認できない(50)。

2 「英雄による大陸反攻」の主張

再び胡蘭成の政論が確認できるのは一九五五年に入つてからである。当時ソ連は平和共存路線を唱えていたが、これは胡蘭成にとっては好ましいものではなかつた。胡は平和共存が続くことは「中国としてみれば、これは本来の中国に還れないことであり、私自身自分の国に帰国出来ないといふこと」とし、「平和的共存が長く続けば、私はこのみじめさから脱却する方法として、自殺するか出家するか手段以外何もものない」と述べている(51)。

翌年の対談でも「将来大きな国際的な変化がありますならば、私は必らず中国に帰つていきたい」と自身の考えを繰り返した。さらに「そのときには、われわれは中国人、日本人の区別なしに、一丸となつてコミニストと闘うわけですが〔中略〕それは政党とかそういうもののじゃなしに、これを天下英雄会(52)」と名付けたいと述べている。そして孫文の黄埔軍官学校などに倣つて、日本で「特殊な大学を作りたい」との希望を披瀝している(53)。

こうした胡蘭成にとつて一九五六年のボズナン暴動やハンガリー動乱はその言論活動に裨差するものであつた。胡蘭成は「この夏以來、ポーランドの暴動、エジプトの反抗、ハンガリーの反ソ戦闘」により、「共産政權とは依然として対立し

反抗し得ることが実証された」ので、「大陸の光復は、必ずしも第三次大戦を要しない(54)」と述べた。

これ以後、胡は積極的に大陸への反攻を軸に議論を展開した。一九六一年一月には「中共の内部崩壊の兆しはいまや明らかとなった。まさに国府軍の大陸反攻の好機」としながらも、「大陸反攻が遅れて核兵器による全面戦争と時期がマシマシになる」事態を憂慮し、そのためにも「核兵器の全面戦争がまだ起らない前に先手を打って中共を打倒し、新生中国と日本が連合し、新たな西洋世界の危機にいかに対処するかを考慮する」必要があると述べている(55)。

大陸反攻への思いは、様々な形で繰り返された。「この一年来、中共の軍心はすでに離反をはじめた〔中略〕中共の中・上級幹部の間には、すでに意見の対立が生じているが、これは大軍団の叛離から内戦に至る兆しとみてよい(56)」、「只今の中国内部の状態は、恰もポーランドやハンガリーで動乱が起った時の直前に似ております(57)」、「一九六三年の国民政府の大事は大陸反攻である。国民政府のみならず、全世界もまた中共打倒を第一大事とする。中共を打倒し、新中国が出現すれば、そこに新しい思想の出現もあるう(58)」などといった主張には胡蘭成の強い願望も込められているよう。しかしそうした主張は、胡蘭成に近い人々からも疑問視されるなど(59)、一般には中国事情を見通すものとは見られなかったと考えられる。

これは胡蘭成の議論を掲載する媒体の変化からも明らかである。この時期、胡蘭成が議論を掲載したのは、全国師友協

会の『師と友』、アジア問題研究会の『亜細亜』、熊本の地方雑誌『日本談義』など、保守系の専門誌へ紙ないしは地方の刊行物だった。一九六一年九月から六八年六月までほぼ毎月にわたり一六〇篇以上の文章を寄せた『ジャーナル』(旬刊)(60)は名古屋の地方誌で、政治評論家の岩淵辰雄の他、鍋山貞親(社会運動家)・中山優・石森久弥(元朝鮮公論社長)・安岡正篤らが寄稿し、時に蒋介石や陶希聖といった中華民国の人士の議論も掲載したが、輿論一般への影響力は限定的だったと考えられる。

ただ胡蘭成に魅了される日本の文化人もあり、この時期胡の交際は、戦前からの知己のみならず、保田与重郎・尾崎士郎・岡潔といった戦後知り合った日本人にも広がっていた。例えば作家の尾崎士郎は胡蘭成の印象について、「僕は初めてあなたにお目にかかったときに、なにごとかを感じたのです」とし、「胡蘭成先生が、自分の精神をそこにこめて立ち上っていかれるならば、日本とか中国とかいうような問題じゃなくて、東洋全体を貫くものを築きあげられると思う」と胡蘭成を高く評価した(61)。

孫文や宮崎滔天らとも交流のあった熊本の名士紫垣隆も胡蘭成と交流を持った一人である(62)。宮崎滔天のように孫文の革命に献身した日本人がいたことは知られているが、胡蘭成も自身と日本人との関係をこれに重ね合わせていたと思われる。しかし胡蘭成の活動に資金を投じてまで支援する人はほとんどいなかった。岩淵辰雄を通じての岸信介や正力松太郎からの資金援助も実現しなかった(63)。

3 中国の原爆保有を受けて——神道への傾倒

一九六四年一〇月、中国が核実験を成功させた。胡蘭成は、自らの悪い予想が的中したと思ったに違いない。これまでの議論でも胡蘭成は中国の核保有に警鐘を鳴らし、逆説的な言い回しながら「中共に残された夢が一つある。それは早く原子爆弾を自家製造して、対外的に新局面を打開し、対内的困難を転嫁ないし解決すること」などと指摘していた。しかし同時に「中共政権存亡の決定的瞬間は、一年半以内に到来する」と、中国の政権崩壊の方がそれに先んじることに期待を寄せてもいた⁽⁶⁴⁾。

おそらく胡蘭成はこれを機に大陸反攻と自身の帰国の可能性が完全に絶たれたと悟ったに違いない。これはその政論の傾向やその後の胡蘭成の行動にも現れている。政論では、原爆実験直後に時局への発言が途絶え、さらにその後は中国時事に関する主張が減少した。代わりに増えたのは日本の政治・外交、社会・公害問題への言及である。一九六五年には保守系の『教育日本新聞』へも論説を掲載するようになる。

こうした傾向に拍車をかけたのが、一九六六年に紹介された筑波山梅田開拓筵主の梅田美保との邂逅である。同筵は神道系の修養団体だが、胡蘭成はここにしばらく滞在し、保田与重郎・梅田美保と連名で「一切の西洋の框に嵌められたものを排し、わが正しい歴史学権力と功利に俗化されない政治学、情操ある経済学、清明と幸せの思想に基く自然科学と美術学等々を講ずる」私学校設立を構想した。胡蘭成によれば、この学校は「松陰塾や西郷南洲翁の私学校（中略）孫文の黄埔軍校やタゴールの国際大学、乃至レーニンの東方大学や、毛沢東の延安大学をも照らし合せ」たものであった⁽⁶⁵⁾。また与良エ（中、日新聞社長）ら支援者を相手に開拓筵で講義を担当し、その内容は梅田の助けを借りて講義録として発行された。

この頃胡蘭成は「私がかつて『山河歲月』の著には神は要らないと言った。これも近年になつてやうやく宗教に染まらない日本神道を知つて、わが身の神神しいのを喜ぶ⁽⁶⁶⁾」と、その心境の変化を告白している。そして、政党・宗教や組織力によらない集まりとして「天下英雄会」の設立を提唱し、「春風による一代の人心を動かすこと、対立や闘争とせず、天意に叶つて大変革による新しい政治経済制度を創造し、世の中を清め鎮めること」を唱えるに至った⁽⁶⁷⁾。

四 小結

以上、本稿では政論家としての側面に注目して胡蘭成の戦前・戦後の歩みを検討してきた。その結果次の三点が明らかになった。一つには、新聞記者をきっかけに世に出た胡蘭成は、中国大陸・香港・日本と場所は変わりながらも、基本的には政論家として活動を続けた点である。もちろん胡は藝術や美的なものへの関心も高かったが、それも、多くは時事的問題や政論を扱う文脈で語られた点は留意する必要がある。一見散漫にも見える胡蘭成の言論活動だが、胡蘭成の政論家としての側面に注目すると一貫性があり、それは戦前と戦後

を越えて継続するものだったのである。

二つには、胡蘭成の政論は、その日本亡命当初こそ日本の主要メディアに取り上げられたものの、その後間もなくして限られた媒体が扱うにとどまった点である。これは胡蘭成の中国を巡る将来の想定が、非現実的なものと見なされていたことが大きい。これを決定的なものにしたのが中国の核実験成功であった。以後胡蘭成の議論からは中国の現状分析は減少し、代わりに神道・天皇等、また現代日本の抱える諸問題への言及が増加する。

ここから言えることは、胡蘭成にとつては戦前と戦後、あるいは中華人民共和国成立に伴う断絶よりも、一九六四年の方がより大きな意味を持っていた、ということである。これは当時日本に亡命していた汪政権の外交官の動向とも共通する。胡蘭成と同じく汪政権に関わった譚覚真も戦後しばらくは日本の雑誌で中国分析を展開したものの、やはり一九六〇年代半ばからはその活動は減少しているのである⁽⁶⁸⁾。

三つには、戦後の日本社会の中に戦時中の対日協力者を受け入れる空間が存在した、という点である。胡蘭成は戦前からの繋がりだけでなく、戦後も日本人との交際関係を広げ、政論を発表し続けた。これは戦後日本の対中交流の文脈では従来ほとんど検討されてこなかった側面である。ただそうした日本社会の空間、すなわち胡蘭成が交流した日本人のほとんどが所謂保守系に分類される人々に限られた点を忘れてはならない。しかもその中にも正力松太郎のように胡蘭成につれない態度の者もいたのである。従って胡蘭成の「日本的三

個主要政党、対胡均尊崇礼遇、甚至奉之為先生」「広結政経実力人物」「多与各地豪傑交遊」（いずれも唐君毅宛の胡蘭成書翰）といった自己規定は⁽⁶⁹⁾、胡自身の認識としては興味深い、実状とは異なっていたというべきである。またこのことは、胡蘭成の日本認識は、一部の保守系の傾向を持った人々との交流の中で影響を受け、育まれた蓋然性が高いことも窺わせる（胡蘭成には日本留学の経験もなかった）。戦後の胡蘭成の議論、とりわけその日本に関する議論を読む際には、こうした背景も意識する必要があるのである。

注

(1) 胡蘭成著・池田篤紀訳『中国のこころ』（明徳出版社、一九五六年）の折り込み附録。

(2) 高見順『渡支日記』（一九四四年一月一日の条）、『高見順日記』第二巻ノ下、勁草書房、一九六六年、八五六頁。

(3) 『政論家』胡蘭成的過去と現在』『漢奸醜史』三・四期、一九四五年。

(4) 拙稿「中国人対日協力者の戦後と日本―善隣友誼会設立への道」『中国―社会と文化』三一号、二〇一六年。

(5) 張桂華『胡蘭成伝』自由文化出版社、二〇〇七年；薛仁明『胡蘭成―天地之始』爾雅出版社、二〇一五年（如果出版社、二〇〇九年初版）。

(6) 王德威「裏切りのリリシズム―戦中から戦後におけ

- る胡蘭成」、王德威・廖炳惠・松浦恒雄・安倍悟・黄英哲編『帝國主義と文学』研文出版、二〇一〇年。
- (7) 黄錦樹「論胡蘭成的神学」『海港都市研究』八号、二〇一三年。
- (8) 陳昶「胡蘭成研究綜述」『文学界—理論版』一二期、二〇一一年。
- (9) 金文京「胡蘭成对台湾文学之影響及其与日本近代文藝思想之關係」、何寄澎主編『文化、認同、社会変遷—戦後五十年台湾文学國際學術研討會論文集』行政院文化建設委員會、二〇〇〇年。
- (10) 金文京・濱田麻矢「日本亡命後の胡蘭成—保田與重郎との關係を中心に」『未名』一九号、二〇〇一年。
- (11) 特記なき限り薛仁明前掲書附録胡蘭成年表に基づく。
- (12) ちなみに鄒平凡も一九五一年に日本に亡命し、一九六五年には日本に帰化し時に東重光を名乗った。鄒平凡は一九七八年—二月三〇日に都内で死去した。「鄒平凡氏」(訃報)『朝日新聞』一九七九年一月一日、二三面。
- (13) 蘭「時評政府与人民亟応商榷經濟建設計劃」『中華日報』一九三七年五月一日、二張二頁。
- (14) 蘭「時評日内閣之更迭」『中華日報』一九三七年六月二日、二張二頁。
- (15) 拙稿『『中華日報』社評目録(1)』『明大アジア史論集』二〇号、二〇一六年。
- (16) 拙稿「上海を統治する—汪兆銘政權の人々」堀井弘一郎・木田隆文編『戦時上海グレイゾーン—溶融する「抵抗」と「協力」』勉誠出版、二〇一七年。
- (17) 胡蘭成『日本及び日本人に寄せる』日月書店、一九七九年、六七—六八頁。
- (18) 譚寬真『潜行三十年』文言社、一九七七年、九八—一〇二頁。
- (19) 胡蘭成「中国のこころ—戦時中の日華和平運動について」『文藝春秋』一九五二年八月号。
- (20) 拙稿前掲『『中華日報』社評目録(1)』。
- (21) 原勝・胡蘭成・郭秀峰「中華日報の論說委員と語る」(一九三九年一月二三日)『東亜解放』一九四〇年一月。
- (22) 倪弘毅「胡蘭成二三事」『鍾山風雨』二〇〇一年四期。
- (23) 胡蘭成前掲「中国のこころ—戦時中の日華和平運動について」。
- (24) 拙稿「袁殊と興亜建国運動—汪精衛政權成立前後の対日和平陣営の動き」『東洋学報』九四卷一号、二〇一二年六月。拙稿「興亜建国運動とその主張—日中戦争期中国における和平論」『中国研究月報』六六卷七号、二〇一二年七月。
- (25) 流沙「興亜建国と日支の青年」、上海日本総領事館特別調査班訳『興亜建国運動の理論と主張』同班、一九四二年五月。

- (26) 胡蘭成「專論到全面和平之路」『民国日報』（南京、一九四三年一〇月三日、一頁）。
- (27) 池田篤紀「前書」（一九四五年二月一四日、南京陰陽宮六三號）、胡蘭成『中国の統一と解放のために』大陸新報南京支社、一九四五年。なお池田は、戦争末期に胡蘭成に対し「姓名判断から災難があるといひだし、何度も改名を迫」り、それを拒み切れなかった胡蘭成は「敦仁」と改名したという。胡蘭成『汪精衛遺囑』に想う 誠実な反省が必要 誤まられがちな汪先生の真意』（一九六四年五月一五日）『ジャーナル』六二二号、一九六四年五月二二日、七面。
- (28) 北一輝著、蔣遇圭訳「中国革命外史」『苦竹』一期、一九四四年一〇月。
- (29) 胡蘭成前掲『『汪精衛遺囑』に想う』。
- (30) 胡蘭成「国民会議召集の意義に就て」前掲『中国の統一と解放のために』一七一—一八頁。
- (31) 竹之内安巳「南京回想記」（一九六九年六月）、中山優『中山優選集』同選集刊行委員会、一九七二年、四一七頁。
- (32) 池田篤紀前掲「前書」。
- (33) 胡蘭成前掲「中国のこころ—戦時中の日華和平運動について」。
- (34) 胡蘭成『日本の解放と世界の解放—中国人の手記』一九四五年九月下旬、騰写版。
- (35) 「息子は中共の役人反共に燃やす」あすへの希望、胡蘭成元汪政權法制局長官亡命者⑤『読売新聞』一九五九年一〇月二九日、一一面。
- (36) 「胡蘭成呈蔣中正中国新生運動計画草案」（一九四九年）、国史館、蔣中正總統文物、檔号 002-080101-028-006-002。
- (37) 曾叔元「從日韓蔣同盟到亞洲聯盟」『群衆』（香港版）二卷四〇期、一九四八年。
- (38) 「陶希聖呈蔣中正轉胡蘭成对美国日本中共等方面報告与建議」（一九五一年四月六日）、国史館、蔣中正總統文物、檔号 002-080200-342-020-004。
- (39) 清水董三跋文、胡蘭成前掲『中国のこころ』一八九頁。
- (40) 『読売新聞』前掲。
- (41) 清水董三前掲。
- (42) 「橘善守氏（訃報）」『毎日新聞』一九九七年二月二五日、三二面。
- (43) 胡蘭成（特別寄稿）「中共・朝鮮動乱に介入」『毎日新聞』一九五〇年一一月四日、一面…「東西陣営アジアで対峙—胡蘭成氏特別寄稿」同一九五一年一月一日、四面…胡蘭成「中共のねらうもの」同一九五三年一月一日、五面。
- (44) 胡蘭成「日本への提言—スイスとなるより第二のトルコとなれ」『毎日情報』六卷一号、一九五一年六月…「マッカーサー元帥に呈す—特にアジアに対する認識について」同六卷七号、一九五一年七月。

- (45) 胡蘭成「日本の大道」(4)・(6)『東三新聞』一九五三年二月一三・一五日、各一面。
- (46) 胡蘭成前掲「中共のねらうもの」。
- (47) 原勝・胡蘭成・郭秀峰前掲「中華日報の論説委員と語る」。
- (48) 「東西陣営アジアで対峙」胡蘭成氏特別寄稿」前掲。
- (49) 筆者所蔵の胡蘭成『山河歲月』(西貝印刷所、一九五四年)の見返し書き込み(昭和三十一年四月廿五日)。本書出版に尽力した池田篤紀のものと考えられる。ルビは筆者が施した。
- (50) 一九五三年二月一〇日から二〇回にわたり『東三新聞』で「日本の大道」を連載するが、これは一九五一年に執筆されたものである。
- (51) 胡蘭成「中国人として」『師と友』七巻八号、一九五五年八月。
- (52) 一九五五年頃、胡蘭成は「哲学者、詩人でなければ政治を行ふべからず」という主旨の「天下英雄会」というパンフレットを書いたという。「政治と革命と文学」座談会『太和壬子輯(教学叢書三巻)』筑波山梅田開拓筵、一九七二年七月一五日、一〇八頁。
- (53) 胡蘭成・尾崎士郎・清水董三「対談ささまざまな英雄——今日の現実と新人間像」『亜細亜』四巻三号、一九五六年七月。
- (54) 胡蘭成「自序」(一九五六年一〇月二八日)、胡蘭成前掲『中国のこころ』四頁。
- (55) 胡蘭成「世界の危機に曝される世界米國、反転して強気に」『ジャーナル』一九六一年一月一日、五面。
- (56) 胡蘭成「天下篇(3)」『ジャーナル』一九六二年一月一日、一面。
- (57) 俵常利「胡蘭成氏の「最近の中国」をきく」『信人』三二巻三号、一九六二年三月。
- (58) 胡蘭成「歴史の新しき出発——今や何ら新意なし思想的疲労を癒すものは何か」『ジャーナル』一九六四年一月一日、五面。
- (59) 俵常利「右の聴講所感」、俵常利前掲「胡蘭成氏の「最近の中国」をきく」。
- (60) 胡蘭成の回想録『今生今世』はジャーナル社から刊行されている。
- (61) 胡蘭成・尾崎士郎・清水董三前掲「対談ささまざまな英雄——今日の現実と新人間像」。この他、尾崎士郎「山河歲月」も「亡命の志士胡蘭成に捧げ」られている。尾崎士郎「雲と残月」光風社、一九六三年。保田与重郎「亡命」『方聞記』新潮社、一九七五年、一二〇頁。なお尾崎の胡蘭成に対する印象は、戦時中に維新政府実業部部長を務め、やはり戦後は日本で活動した王子恵に対するものとも類似しており、尾崎の人となりを考える上でも興味深い。拙稿「日中戦争前後における日中間交渉の一形態——王子恵と彼を巡る人々」『現代中国研究』三五・三六合併号、二〇一五年。
- (62) 胡蘭成「天下の大老」、紫垣隆翁喜寿祝賀会『喜寿

紫垣隆翁』小壺天出版、一九六一年、四二―四六頁。
 紫垣隆（二八八五―一九六八年）の経歴については、
 井上智重『異風者伝―近代熊本の人物群像』熊本日日
 新聞社、二〇一二年、二八七―二九二頁。

〔63〕前掲「政治と革命と文学 座談会」。

〔64〕胡蘭成「天下篇（4）」『ジャーナル』一九六二年一
 月一日、四面。

〔65〕梅田美保・保田与重郎・胡蘭成「私学校創設趣意書
 草案」『講義録 丙午輯（教学叢書一卷）』筑波山梅田
 開拓筵、一九六七年二月一日、一三一―一三六頁。

〔66〕胡蘭成『建国新書』東京新聞出版局、一九六八年、
 二四四頁。

〔67〕胡蘭成前掲『建国新書』二五七―二六三頁。

〔68〕拙稿「大使館の人々―汪政權駐日使領館官員履歴」、
 相原佳之・尾形洋一・平野健一郎編『東洋文庫蔵汪精
 衛政權駐日大使館文書目録』東洋文庫、二〇一六年。

〔69〕薛仁明『胡蘭成・天地之始』爾雅出版社、二〇一五
 年、一七五、一七七―一七八頁。

193 戦前戦後を越える思想

胡蘭成年表

年	月	日	年齢	胡蘭成に関する事項	備考
1906	2	28	1	浙江省嵊県下北郷胡村に生まれる。小名積蕊。	
1918			13	紹興第五師範附属高等小学校二年に入学。父親と杭州に行く。	
1919			14	高等小学校卒業、紹興第五中学に進学。一学期だけ在籍し胡村に戻る。	
1920			15	杭州蕙蘭中学に進学。	
1923			18	蕙蘭中学四年次に校刊を編輯したことで、退学する。	
1925	10		20	玉鳳と結婚。胡村小学で教鞭をとる。	
1926	3		21	杭州郵政局で郵務生となる。三ヵ月後に免職。	
	9			燕京大学副校長室で文書清書の仕事を一年する。大学の授業を聴講。	
1927	2		22	北京を離れ、故郷で年を越す。	
1928	夏		23	岳父と奉化雪竇寺に行き、その後八日間南京に滞在。職を探すも見つからず。斯頌徳（蕙蘭中学同学）の杭州の家に一年滞在。	
1930			25	杭州中山英文専修学校で教壇に立つ。	
1931	年初		26	蕭山湘湖師範学校で教壇に立つ。	
	夏			湘湖師範学校を離れ胡村に戻る。翌年春に広西に行く予定であったが、第一次上海事変勃発と妻の病気のため、家に一年滞在。	
1932	1	28	27		第一次上海事変勃発。
	4	11			『中華日報』創刊。
	6	28		妻・玉鳳病没。	
	8～9			国民革命軍第四集團軍総司令部政訓処に任職していた崔真吾の紹介で広西に行き、南寧の広西第一中学で教壇に立つ。	
1933			28	散文集『西行上』出版。	
				百色の第五中学に移り、二年間教壇に立つ。	
				全慧文と結婚。	
1935			30	柳州の第四中学に移り、二年間教壇に立つ。	
1936			31	国民革命軍第七軍軍長廖磊の紹介で、『柳州日報』の仕事を兼任。対日抗戦必須と民間起兵の気運を鼓吹。	
	6			両広事変が起きるが、すぐに失敗する。胡蘭成は国民革命軍第四集團軍総司令部に33日間監禁。	
1937	年初		32	白崇禧に手紙を書き釈放される。	

年	月	日	年齢	胡蘭成に関する事項	備考
1937			32	胡村に戻る途中、上海で古詠今（中華日報勤務）に会う。帰郷後、中国の手工業と関税に関して執筆した文章が『中華日報』に掲載される。	
	4			『中華日報』主筆となり、上海に行く。	
	7	7			盧溝橋事変勃発。
		15		華北事変討論会に出席（於上海市商会）。	
	8	13		第二次上海事変後、胡蘭成一家はフランス租界へ移る。	
	11	29			戦争激化のため『中華日報』休刊。
1938	年初		33	香港『南華日報』総主筆となり、「流沙」の筆名で社論を執筆。同時期、蔚藍書店の仕事も兼務し、戦時国際情勢を研究。	
	10			『最近英国外交的分析』（商務印書館）出版。	
		19			汪精衛、重慶を離れハノイへ。
	12	30			汪精衛「艷電」発表。
1939	4 末～5 初		34	汪精衛に従い、香港から上海に移る。	
	7	10			『中華日報』復刊。
	8	28			国民党（汪派）第六回全国代表大会開催。
	9	1			ドイツ、ポーランドに侵攻（第二次世界大戦）。
	11	23		原勝・郭秀峰と座談会（於上海傳式説邸）。	
1940	1		35	『戦難和亦不易』（中華日報社評集）出版。	
	3	30		宣伝部政務次長に就任、『中華日報』総主筆・汪精衛機要秘書兼任。	汪政権成立。
	夏			『中華日報』総主筆辞任。	
	11	5		神戸到着。紀元二千六百年記念式典参列のため。	
		30			日華基本条約締結。
1941	2	28	36	『国民新聞発刊辞』発表、『国民新聞』総主筆に就任。	
				『国民新聞』に掲載した批評により、宣伝部次長を免職。	
	12	8			日本、米英に宣戦布告。
1942	2		37	行政院法制局長に就任。	
	9			『争取解放』（国民新聞社論集）出版。	

195 戦前戦後を越える思想

年	月	日	年齢	胡蘭成に関する事項	備考
1942	11	19	37		汪精衛訪日（～26日）。
				汪精衛に対米英参戦反対を提言。	
1943	2		38	法制局の解消により、経済委員会特派委員に就任。	
	3				蒋介石『中国之命運』（正中書局）出版。
	10	3		「到全面和平之路」を掲載。これをきっかけに池田篤紀と知り合う。	
		30			日華同盟条約締結。
	12			筆禍（「日本帝国主義必敗、南京政府覆滅、召開国民会議等）のため逮捕。	
1944	1	24	39	池田篤紀の尽力で釈放。	
	2	1		上海に戻る。	
		4		張愛玲と知り合う。	
	6			張愛玲と結婚。	
	7			日本はただちに中国から撤兵すべきことを公表。	
	11	10			汪精衛、名古屋で逝去。
				張愛玲と『苦竹』（月刊）創刊。池田篤紀・清水董三・谷正之、胡蘭成を湖北へ送るために尽力。沈啓无・関永吉等と漢口『大楚報』を接收。	
1945	1		40	漢陽天主堂で講演。	
	春			周訓徳（漢陽医院看護士）と恋愛。	
	3			上海に戻る。途中南京で陳公博等と会見。	
				武漢に戻る。	
				『中国人的声音』（大楚報社）出版。	
				『中国の統一と解放のために』（大陸新報南京支社）出版。	
	8	11			ポツダム宣言受諾の『中華日報』和平号外配布。
					日本投降。
		15			
				鄒平凡と武漢独立を宣言（13日間で失敗）。	
	9	初		傷病兵に変装し武漢を脱出。	
		5		南京に到着。日本憲兵隊と秘密裏に晚餐。	
		7		日本軍少佐に変装し、憲兵隊佐官3人と鉄道で上海へ向かう。谷正之・清水董三・池田篤紀の庇護。	
		30		浙江諸暨に至り、斯頌徳の実家に滞在。	
		下		『日本の解放と世界の解放——中国人の手記』を記す。	

年	月	日	年齢	胡蘭成に関する事項	備考
1945	12		40	温州へ逃亡。途中范秀美と結婚。潜伏中は張嘉儀を名乗る。	
1946	2	中	41	張愛玲、温州に胡蘭成を訪ねる。	
	4			温州から再度諸暨へ移る。	
1947	年初		42	梁漱溟と通信。『山河歲月』執筆開始。	
	6	10		張愛玲より来信、胡蘭成と決別。別に潜伏用資金30 万元を送る。	
	9			温州中学で教鞭をとる。	
1948	2	中	43	雁蕩山に移り、淮南中学教務主任に就任。	
1949	2	上	44	温州中学に戻る。	
	5	7			人民解放軍温州入城。
	夏			甌海中学に移る。	
	10	1			北京に中華人民共和國成立。
	12				中華民国台北に遷都。
1950	年初		45	「生活指導委員会」学生代表により罷免。	
	3			梁漱溟の招きで北京行を検討。	
	末			鄒平凡等と上海を離れ、広州から香港に向かう。	
	4			香港に渡る。香港で樊仲雲・余愛珍等と会う。	
	6	25			朝鮮戦争勃発。
	9	7		唐君毅と知り合う。	
		19		香港を離れ日本に向かう。	
		26		清水董三宅に着き、その後池田篤紀宅（清水市）に移る。	
1951	2	中	46	訪日中の何応欽と会見。	
	3	15		東京に転居。	
	4	14		訪日中の徐復観を接待。	
	7	末		家主の日本婦人と恋愛。	
	9	8			サンフランシスコ平和条約締結。
1952	10	25	47	池田篤紀（清水新聞社長）他と佐久間ダム視察のため豊橋訪問。	
				「朝鮮戦争と日本の前途」を講演。	
1954	3		49	『山河歲月』（西貝印刷所）出版。	
				余愛珍（呉四宝元妻）と結婚。	
1955	11		50	錢穆と会見。	
1956	12	10	51	『中国のこころ』（明徳出版社）発行。	
1957	1	30	52	尾崎士郎と知り合う。	
	2	10		唐君毅、日本で講演（～23 日）。	
1958	12		53	『今生今世』上冊（ジャーナル社）出版。張愛玲に送る。	

197 戦前戦後を越える思想

年	月	日	年齢	胡蘭成に関する事項	備考
1959	6		54	鹿兒島の進学予備校で「古典と人生」を講演。	
	9			『今生今世』下冊（ジャーナル社）出版。	
	10	29		『読売新聞』連載「亡命者」で紹介される。	
1960	12	28	55	尾崎士郎とNHK「朝の訪問」で対談。	
1962	10		57	「世界的転機在中国」連載開始（『新聞天地』）。	
1963	7		58	『世界的転機在中国』（新聞天地社）出版。	
1964	8		59	唐君毅東京で胡蘭成、安岡正篤と会う。	
	10	19			中華人民共和国核実験に成功。
1965	10	22	60	孫文・宮崎滔天銅像落成式（紫垣隆主宰）に参加（熊本）。	
1966	5		61		文化大革命勃発。
				梅田美保と知り合う（筑波山梅田開拓筵）、筑波山に滞在。	
1967	2	11	62	『講義録 丙午輯（教学叢書一卷）』（筑波山梅田開拓筵）出版。	
	4			『心経随喜』（梅田開拓筵）出版。	台湾で中華文化復興運動推行委員会発足。
1968	5		63	『建国新書』（東京新聞出版局）出版。	
	8	10		『卿雲 丁未輯（教学叢書二卷）』（筑波山梅田開拓筵）出版。	
	秋			岡潔・保田与重郎と高野山等に行く。	
1969	2	11	64	胡蘭成之書展（日本橋三越）。	
				『胡蘭成之書』（梅田開拓筵）出版。	
	3	8		胡蘭成之書展（名古屋丸栄）。	
	10	17		胡蘭成之書展（土浦・水戸）。	
	12			『建国新書』、『新聞天地』（香港）に連載開始。	
1970	3		65	胡蘭成之書展（大阪なんば高島屋）。	
				湯川秀樹と知り合う。	
1972	2		67	『自然学』（梅田開拓筵）出版。	
	7	15		『太和 壬子輯（教学叢書三卷）』（筑波山梅田開拓筵）出版。	
	9	29			日中共同声明。日本 中華民国と断交。
	10			華僑代表団と訪台。陳立夫・張其昀などと会い、文化学院に招聘される。	
1974	5		69	台湾華崗に住み、文化学院教授に就任。	
	8			朱西寧と会う。	
	12			『華学科学与哲学』（華崗出版社）出版。	
1975	6		70	蔣経国に手紙を送る。	

年	月	日	年齢	胡蘭成に関する事項	備考
1975	9		70	周同（胡秋原）「漢奸胡蘭成速回日本去！」『中華雑誌』に掲載。	
	10			文化学院の授業停止。	
1976	1	末	71	日本に戻る。	
	4			再度訪台するが、文化界の反発で、文化学院を離れ、朱西寧宅隣に移る。	
	11			日本に戻る。	
1977	4		72	『三三集刊』創刊。	
1978	8	12	73		日中平和友好条約締結。
1979	1		74	『日本及び日本人に寄せる』（日月書店）出版。	
	5			『禅是一枝花』（三三書坊）出版。	
	10			『中国礼楽』（三三書坊）出版。	
1980	10		75	『天と人との際』（清渚会）出版。	
1981	7	25	76	東京福生で逝去。	
	8	30		清岩院（福生）で葬儀。福田赳夫・宮崎輝・保田与重郎・赤城宗徳他参列。	
1982	7			『機論「道機と禅機」』（花曜社）出版。	
参考：薛仁明『胡蘭成・天地之始』（爾雅出版社、2015年）附録胡蘭成年表を元に、諸論文で修正補訂。					

199 戰前戰後を越える思想

胡蘭成論文一覽

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1925	4		春日之景象	『蕙蘭校刊』1 卷 1 号
1925	4		西湖之旅	『蕙蘭校刊』1 卷 1 号
1929	10		中国郷党制度沿革考	『政治学刊』創刊号
1931			一輛貨車	『湘湖生活』12 期
1932	11	20	關於浙江省立鄉村師範	『教育週報』30 期
1932	11	23	中学生国文課外読物的一点商榷	『教育論壇』2 卷 2 期
1933	1	23	初恋心理的分析	『広西青年』12 期
1933			民衆教育諸問題	『民衆園地』1 卷 3・4 期
1933			從民間歌謠裏所認識的民衆生活	『民衆園地』1 卷 5 期
1933	4	15	承德的陷落	『民衆園地』2 卷 1・2 期
1935	1	15	在民主的口号下集合起来	『三民主義月刊』5 卷 1 期
1937	4	11	对經濟建設貢獻一点意見	『中華日報』
1937	4	17	西班牙結束内戰的傾向	『中華日報』
1937	4	21	關於罷工	『中華日報』
1937	4	23	英日对華合作的可能性	『中華日報』
1937	4	26	經濟建設的幾個根本問題	『中華日報』
1937	4	28	中国政權統一の傾向	『中華日報』
1937	4	30	日本政局の動向	『中華日報』
1937	5	1	五一節	『中華日報』
1937	5	1	世界民主潮流の再穩定	『中華月報』5 卷 5 期
1937	5	5	对国民大会与『開放党禁』	『中華日報』
1937	5	8	論地方自治	『中華日報』
1937	5	11	政府与人民亟応商榷經濟建設計劃	『中華日報』
1937	5	13	論桂幣改革	『中華日報』
1937	5	17	物価高漲与中国經濟建設	『中華日報』
1937	5	19	林内閣の戦術	『中華日報』
1937	5	20	太平洋集体安全与中国	『中華日報』
1937	5	24	国聯政院常会の觀測	『中華日報』
1937	5	29	日本新党運動の觀測	『中華日報』
1937	6	1	準戦体制下の日本金融	『中華月報』5 卷 6 期
1937	6	2	日内閣之更迭	『中華日報』
1937	6	5	關於土地法	『中華日報』
1937	6	8	日本外交動向	『中華日報』
1937	6	9	現階段日本帝国主义發展中の近衛内閣	『中華日報』
1937	6	10	農本局の任務	『中華日報』
1937	6	12	所謂通貨膨張問題	『中華日報』
1937	6	19	蘇聯党獄	『中華日報』
1937	6	21	中国手工業の容貌	『中国世界經濟情報』1 卷 16 期
1937	6	22	欧洲与美国	『中華日報』
1937	6	24	羅斯福政權の透視	『中華日報』
1937	6	25	再論總予算	『中華日報』

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1937	6	29	西班牙戰事的幾個階段	『中華日報』
1937	7	2	法郎再貶值	『中華日報』
1937	7	8	世界文化合作的途徑	『中華日報』
1937	7	10	盧溝橋事件	『中華日報』
1937	7	19	中國經濟建設的產業配置	『中國世界經濟情報』1卷20期
1937	7	19	民主革命与民族解放	『中華日報』
1937	7	22	日本的策略与我們的応付	『中華日報』
1937	7	26	益形嚴重之華北局面	『中華日報』
1937	7	26	國難時期的民主政治	『中華日報』
1937	7	30	全面的抗戰	『中華日報』
1937			蘇聯工農生活	『中華月報』5卷7期
1937	8	1	盧溝橋事件在演化	『中華月報』5卷8期
1937	8	4	等待就是滅亡	『中華日報』
1937	8	10	民族抗戰總動員与民主	『中華日報』
1937	8	14	怎樣展開全面抗戰——人人抵抗处处抵抗	『中華日報』
1937	8	15	租界中立！	『中華日報』
1937	8	17	積極推行救國公債	『中華日報』
1937	10	6	怎樣救濟失業工人	『中華日報』
1937	10	12	戰時教育問題	『中華日報』
1937	10	14	行將召開的九國公約會議	『中華日報』
1937	10	18	經濟制裁的關鍵在美国	『中華日報』
1937	10	19	對於增稅的意見	『中華日報』
1937	10	20	九國公約會議的重心何在	『中華日報』
1937	10	22	對日經濟絕交	『中華日報』
1937	10	24	如何籌措戰費	『中華日報』
1937	10	27	如何加緊輸出？	『中華日報』
1937	10	28	比國閣潮	『中華日報』
1937	10	31	再論九國公約會議——調停暴走不通之路！	『中華日報』
1938	7	15	德國對捷和緩以後	『政論旬刊』1卷17期
1938	10	16	美國的十一月議會改選	『國際週報』25期
1938	11	20	凱末爾与土耳其	『國際週報』30期
1938	12	4	世界經濟動態	『國際週報』32期
1938	12	25	第九次汎美會議開會	『國際週報』35期
1939	1	3	我們的鄭重聲明	『南華日報』社評
1939	1	4	和与戰	『南華日報』社論
1939	1	11	当前的選圯	『南華日報』社論
1939			和議与統一	『戰難和亦不易』
1939			国民党切勿自暴自棄	『戰難和亦不易』
1939			評五中全会宣言——關於部份外交	『戰難和亦不易』
1939			和議的時機与和議的運用	『戰難和亦不易』
1939			一個總檢討	『戰難和亦不易』
1939			五中全会陳辭	『戰難和亦不易』
1939			戰難，和亦不易！	『南華日報』

201 戰前戰後を越える思想

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1939			以直接交渉引致國際調停	『戰難和亦不易』
1939			從近衛聲明到平沼內閣	『戰難和亦不易』
1939	2	5	本屆日本議會的考察—關於外交部份	『戰難和亦不易』
1939			轉移目標—斥大公報與新華日報	『戰難和亦不易』
1939			斥誣蔑構陷	『南華日報』社評
1939			斥吳稚暉	『南華日報』社論
1939			再斥吳稚暉	『南華日報』社論
1939	5	10	德義軍事同盟	『南華日報』社評
1939	5	11	革命與反動	『南華日報』社評
1939	5	14	和局的危機	『南華日報』社評
1939	5	28	要求理解	『南華日報』社論
1939	5	31	補充幾句話	『南華日報』社論
1939	6	10	展開光明的前途	『南華日報』社論
1939	6	21	民衆亟應起而自決	『南華日報』社評
1939	6	25	蘇聯外交真相	『南華日報』社評
1939	6	28	半年來的國際經濟	『南華日報』社評
1939	7	25	和議非權術能致（和議與權術）	『中華日報』
1939	7	27	撤兵問題	『中華日報』
1939	7	29	美日商航條約廢止	『中華日報』
1939	8	3	對於大亞洲主義的認識	『中華日報』
1939	8	5	和議與政權	『中華日報』
1939	8	7	國際軍事同盟之真相	『中華日報』
1939	8	8	在淪陷區工作的意義	『中華日報』
1939	8	12	和議之實現與國民政府之重建	『中華日報』
1939	8	13	一個錯誤的日子	『中華日報』
1939	8	18	發動護黨運動	『中華日報』
1939	8	21	抗戰兩週年後	『三民週刊』1卷1期
1939	8	23	我們對於德蘇簽訂互不侵犯協定的觀察	『中華日報』
1939	8	27	反對暗殺！	『中華日報』
1939	8	26	德蘇不侵犯條約與遠東	『中華日報』
1939	8	27	遠東亟起自救	『中華日報』
1939	8	29	我們對於平沼內閣辭職的見解	『中華日報』
1939	8	31	國民黨的決心與行動	『中華日報』
1939	9	2	歐戰與中日和平	『中華日報』
1939	9	4	我們對於歐戰的態度	『中華日報』
1939	9	5	大戰中各國動態	『中華日報』
1939	9	8	歐戰的展開	『中華日報』
1939	9	9	歐戰與和平運動	『中華日報』
1939	9	10	中日合作的基點	『中華日報』
1939	9	11	和平運動的把握	『中華日報』
1939	9	17	歐戰形勢與遠東形勢	『中華日報』
1939	9	18	中日双方的責任	『中華日報』
1939	9	22	我們的責任與行動	『中華日報』

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1939	10	23	中日和平与亜洲前途	『三民週刊』1 卷 10 期
1939	12	13	愛惜国計民生	『中華日報』
1939	9	28	蘇聯与欧戰	『中華日報』
1939	9	29	当前的和議時機	『中華日報』
1939	10	2	王寵惠的補充声明	『中華日報』
1939	10	4	全面的和	『中華日報』
1939	12	14	我們對於法幣問題的見解	『中華日報』
1939	10	6	再論為什麼要反共	『中華日報』
1939	10	8	希特勒的和平演說	『中華日報』
1939	10	9	美国的地位	『中華日報』
1939	10	11	日蘇互不侵犯条約	『中華日報』
1939	10	12	容認独裁便是容忍亡国	『中華日報』
1939	10	15	三件事的考察	『中華日報』
1939	10	16	中日的共同利害	『中華日報』
1939	10	19	和平空氣	『中華日報』
1939	10	23	中日經濟合作与中国經濟改造	『中華日報』
1939	10	24	經濟合作諸問題	『中華日報』
1939	10	25	中蘇与日美	『中華日報』
1939	10	27	共產党的新陰謀	『中華日報』
1939	10	29	改組政府問題	『中華日報』
1939	10	30	我對於河内案件的見解	『中華日報』
1939	10	30	窮兇極惡与窮途末路	『中華日報』
1939	11	1	日英日美談判	『中華日報』
1939	11	2	蔣共衝突与对日反攻	『中華日報』
1939	12	15	工潮問題	『中華日報』
1939	11	4	講和的責任能力	『中華日報』
1939	11	5	僵持与没落	『中華日報』
1939	11	6	拖与偏安	『中華日報』
1939	11	8	斥莫洛托夫演說	『中華日報』
1939	11	10	日本对美对蘇外交	『中華日報』
1939	11	11	組府問題	『中華日報』
1939	11	12	一個偉大的教訓	『中華日報』
1939	11	13	創造担当和平的力量	『中華日報』
1939	11	14	蔣介石的窮途与說謊	『中華日報』
1939	11	16	蔣介石演說的再駁斥	『中華日報』
1939	11	18	答覆質問 (一)	『中華日報』
1939	11	19	答覆質問 (二)	『中華日報』
1939	11	20	問題与結論	『中華日報』
1939	11	21	英美与中日和平	『中華日報』
1939	11	22	警覺遠東的危機	『中華日報』
1939	11	23	阿部首相的談話	『中華日報』
1939	11	23	座談会 中華日報の論說委員と語る	『東亜解放』1940 年 1 月
1939	11	24	蔣介石的没落与掙扎	『中華日報』

203 戦前戦後を越える思想

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1939	11	26	中国与蔣介石	『中華日報』
1939	11	28	我們的態度	『中華日報』
1939	11	30	恐日病与恐華病（一）	『中華日報』
1939	11		興亜建国と日支の青年	『興亜建国運動の理論と主張』
1939	12	3	恐日病与恐華病（二）	『中華日報』
1939	12	4	恐日病与恐華病（三）	『中華日報』
1939	12	5	蘇芬戦争与欧洲局面	『中華日報』
1939	12	6	野村与格魯的階段	『中華日報』
1939	12	7	欧戰的軌跡	『中華日報』
1939	12	10	欧洲外交の関頭	『中華日報』
1939	12	11	応当覺醒了	『中華日報』
1939	12	12	建軍的使命	『中華日報』
1939	12	13	愛惜国計民生！	『中華日報』
1939	12	14	我們對於法幣問題的見解	『中華日報』
1939	12	15	工潮問題	『中華日報』
1939			中国的立場与日本的責任	『三民週刊』 1 卷 6 期
1940	1	1	中国共產党問題	『三民週刊』 2 卷 1 期
1940	2		一年間の和平運動	『東亜解放』 1940 年 2 月
1940	6	4	新聞界応有的精神	『中華日報』
1940	6	17	欧戰的展開与遠東的危機	『中華日報』
1940	9	22	世界經濟恐慌与世界戦争—在中央宣伝講習所講（上）	『中央導報』 1 卷 8 期
1940	9	29	世界經濟恐慌与世界戦争—在中央宣伝講習所講（下）	『中央導報』 1 卷 9 期
1940	12	13	我對於和平運動的信念	『中華日報』
1941	2	28	国民新聞発刊詞	『国民新聞』
1941	2		日支和平運動に対する我が信念	『東亜解放』 1941 年 2 月
1941	3	1	要做的事	『国民新聞』
1941	3	5	蘇俄的地位	『国民新聞』
1941	3	6	中国地位の保証	『国民新聞』
1941	3	7	巴爾幹戦争の範疇	『国民新聞』
1941	3	10	亚洲民族解放の起点	『国民新聞』
1941	3	11	渝共決裂の序幕	『国民新聞』
1941	3	14	從局部撤兵做起	『国民新聞』
1941	3	18	從收回越界築路入手	『国民新聞』
1941	3	19	美国的行動程序与方向	『国民新聞』
1941	3	20	經濟統制在中国	『国民新聞』
1941	3	21	曾仲鳴先生殉国二週紀念辭	『国民新聞』
1941	3	23	責任与善後	『国民新聞』
1941	3	26	貢獻給全国軍事會議	『国民新聞』
1941	3	28	強化警察！	『国民新聞』
1941	3	29	紀念革命節	『国民新聞』
1941	3	30	還都一週年告知和運同志	『国民新聞』
1941	3		旅日隨筆	『中日文化』 1 卷 1 号
1941	4	5	改造上海金融界	『国民新聞』

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1941	4	7	到全面和平之路	『国民新聞』
1941	4	9	炸彈屠殺和重慶政權	『国民新聞』
1941	4	10	田中之言	『国民新聞』
1941	4	11	蘇俄的处境	『国民新聞』
1941	4	14	美国的兩洋政策	『国民新聞』
1941	4	16	弱者的心理	『国民新聞』
1941	4	18	日蘇協定以後	『国民新聞』
1941	4	21	渝共分裂与中国前途	『国民新聞』
1941	4	23	中国的处境	『国民新聞』
1941	4	25	欧洲戰敗国的命運	『国民新聞』
1941	4	28	渝共衝突及其界限	『国民新聞』
1941	4	30	多做自己的工作	『国民新聞』
1941	5	1	工人運動之流變	『国民新聞』
1941	5	2	悲壯的法蘭西	『国民新聞』
1941	5	3	糾正十四年来的錯誤	『国民新聞』
1941	5	4	紀念「五四」	『国民新聞』
1941	5	5	紀念「五五」	『国民新聞』
1941	5	7	親善之道	『国民新聞』
1941	5	9	德国的戰略被撓動	『国民新聞』
1941	5	12	重心在清鄉工作	『国民新聞』
1941	5	13	近東問題的內延与外延	『国民新聞』
1941	5	14	我們的抗議与決心	『国民新聞』
1941	5	16	本多大使之言	『国民新聞』
1941	5	19	問題的提出与解答	『国民新聞』
1941	5	21	關美国調停中日戰爭說	『国民新聞』
1941	5	23	建軍的途徑	『国民新聞』
1941	5	25	中日和平的正軌	『国民新聞』
1941	5	26	鞭其後者而進之	『国民新聞』
1941	5	28	德国控制大西洋	『国民新聞』
1941	5	29	羅斯福總統的演說	『国民新聞』
1941	5	30	中華民族的氣節	『国民新聞』
1941	6	9	觀念的澄清	『国民新聞』
1941	6	11	兩重權力	『国民新聞』
1941	6	13	怎樣努力？	『国民新聞』
1941	6	15	東亞的關鍵	『国民新聞』
1941	6	24	蘇聯的新評價	『国民新聞』
1941	6	26	德蘇戰爭之展開	『国民新聞』
1941	6	28	清鄉工作的支點	『国民新聞』
1941	6	30	向前邁進	『国民新聞』
1941	7	1	国民政府的國際承認問題	『国民新聞』
1941	7	2	清鄉工作正式開始	『国民新聞』
1941	7	3	應有的風度	『国民新聞』
1941	7	6	「我對於日本国民的希望」書後	『国民新聞』

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1941	7	7	戦争の開端と結束	『国民新聞』
1941	7	8	外交常識	『国民新聞』
1941	7	10	戦争と解放	『国民新聞』
1941	7	10	澄清文化界	『中華日報』
1941	7	11	経済交渉の重点主義	『国民新聞』
1941	7	14	再論重点主義	『国民新聞』
1941	7	16	三論重点主義	『国民新聞』
1941	7	18	日閣改組	『国民新聞』
1941	7	21	日本新閣の外交	『国民新聞』
1941	7	24	国府与国家	『国民新聞』
1941	7	26	越南問題の発展	『国民新聞』
1941	7	28	凍結中日資金	『国民新聞』
1941	7	30	可注意の法国動態	『国民新聞』
1941	8	1	資金凍結後の局勢	『国民新聞』
1941	8	4	從何測量日美關係？	『国民新聞』
1941	8	6	時代与文人	『国民新聞』
1941	8	10	作惡者必自損	『国民新聞』
1941	8	13	紀念八一三	『国民新聞』
1941	8	15	法国政変の動律	『国民新聞』
1941	8	18	美国参戦の序幕	『国民新聞』
1941	8	20	進歩与落伍	『国民新聞』
1941	8	21	是進歩還是歪曲？	『国民新聞』
1941	8	25	曷法国人民	『国民新聞』
1941	8	27	紀念孔子	『国民新聞』
1941	9	1	後死者の責任	『国民新聞』
1941	9	5	清郷工作檢討	『国民新聞』
1941	9	6	美国的理想与现实	『国民新聞』
1941	9	7	和平の進度与帰結	『国民新聞』
1941	9	10	第一期清郷の檢閲	『国民新聞』
1941	9	12	児玉謙次失言	『国民新聞』
1941	9	15	羅斯福演説後の相關事態	『国民新聞』
1941	9	22	外交与国格	『国民新聞』
1941	9	24	恢復正当外交	『国民新聞』
1941	9	25	美国的動態与中立法	『国民新聞』
1941			西方戦局の推移	『国民新聞』
1942	2		『曹涵美画「金瓶梅」』序	『曹涵美画「金瓶梅」第二集』
1942	7	17	文化の厄運	『国民新聞』
1942	7	20	寿顔文樑先生	『国民新聞』
1942	8	1	德軍南下与世界戦局	『国民新聞』
1942	12	22	如何戦勝？	『太平洋週報』1巻48期
1942	12	30	人間味云々	『人間』1巻1期
1943	5	15	和運区経済の癥結	『文友』1巻1期
1943			“言語不通”之敵	『人間』1巻2期

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1943	9		関於花	『人間』1巻3期
1943	10	3	到全面和平之路	『民国日報』
1943	10	23	評路易士	『中華日報』
1943	10	28	周作人与路易士	『中華日報』
1943	10		談談周作人	『人間』1巻4期
1943	10		論書法三則	『人間』1巻4期
1943	11	13	京居隨筆	『中華日報』
1943	12	15	「文化本位」論戰經過	『文友』2巻3期
1944	1	1	參戰一周年座談会	『文友』2巻4期
1944	1		路易士	『文壇史料』
1944	2	15	「中国之命運」の批判	『新東方』9巻2期
1944	3	15	阜隸・清客与来者	『新東方』9巻3期
1944	3	26	話說世界大勢	『申報』(星期評論)
1944	4		周作人与魯迅	『雜誌』13巻1期
1944	5		瓜子殼	『天地』7・8期合刊
1944	6	10	評張愛玲	『雜誌』13巻3期
1944	6	15	「中国の命運」を論ず	『情報』(大東亜省)26号
1944	6		読了紅樓夢	『天地』9期
1944	7	1	言之醜也	『東亜聯盟』8巻1期
1944	7		隨筆六則	『天地』10期
1944	8	10	談談蘇青	『小天地』1期
1944	8		乱世文談	『天地』11期
1944	10		試談国事	『苦竹』1期
1944	10		新秋試筆	『苦竹』1期
1944	10		周沈交惡	『苦竹』1期
1944	10		閒書啓蒙	『苦竹』1期
1944	10		說吵架	『苦竹』1期
1944	10		貴人の惆悵	『苦竹』1期
1944	10		違世之言	『苦竹』1期
1944	11		文明的伝統	『苦竹』2期
1944	11		給青年	『苦竹』2期
1944	11		談論金瓶梅	『苦竹』2期
1944	11		「土地の緑」	『苦竹』2期
1944	11		男飲女愛—二十一年在広西、採集民歌成此篇	『苦竹』2期
1944	12	2	重新做起	『大楚報』
1944	12	3	瞭解的起点	『大楚報』
1944	12	4	抗議轟炸人民	『大楚報』
1944	12	5	首先認識中国	『大楚報』
1944	12	6	無益有害之請求	『大楚報』
1944	12	7	美国生産力の再估計	『大楚報』
1944	12	8	三週年の教訓	『大楚報』
1944	12	9	告重慶	『大楚報』
1944	12	10	抗戰現状の變動程度	『大楚報』

207 戦前戦後を越える思想

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1944	12	11	告日本人	『大楚報』
1944	12	12	停止戦争纔能停止轟炸	『大楚報』
1944	12	14	对美国無期待	『大楚報』
1944	12	15	告中国人	『大楚報』
1944	12	17	美国外交五原則	『大楚報』
1944	12	19	欧洲の実例	『大楚報』
1944	12	20	重慶は何時反攻するか	『大楚報』
1944	12	22	逃難と消災	『大楚報』
1944	12	23	再考慮和平的範圍与階段	『大楚報』
1944	12	24	法俄協定	『大楚報』
1944	12	27	組織西欧国家集团的計劃	『大楚報』
1944	12	28	知己知彼	『大楚報』
1944	12	29	中日問題与中国問題	『大楚報』
1944	12	30	中日問題与日本問題	『大楚報』
1944	12	31	美国对蘇大借款	『大楚報』
1945	1	1	献歲辞	『大楚報』
1945	1	5	論之解放	『大楚報』
1945	1	6	答問	『大楚報』
1945	1	7	物資決定戦局不決定戦争	『大楚報』
1945	1	8	三点認識	『大楚報』
1945	1	9	紀念羅曼羅蘭	『大楚報』
1945	1	10	欧戦拖延之故	『大楚報』
1945	1	11	問題無妥協	『大楚報』
1945	1	13	估量重慶政府	『大楚報』
1945	1	14	美国与欧洲戦争現状	『大楚報』
1945	1	15	延安政府又怎樣？	『大楚報』
1945	1	16	文藝復興提示	『大楚報』
1945	1	17	要求召開国民会議	『大楚報』
1945	1	18	文明の曙光	『大楚報』
1945	1	19	文明の再建	『大楚報』
1945	1	20	蔣介石と其の『中国之命運』	『大楚報』
1945	1	21	中国のメシア	『大楚報』
1945	1	24	中国文明の伝統	『大楚報』
1945	1	28	蔣介石の元旦演説	『大楚報』
1945	1	31	抗戦区人民の動静	『大楚報』
1945	2	2	現代の知識分子なる者	『大楚報』
1945	2	4	如何にして『中国に復歸する』か	『大楚報』
1945	2	5	中国民間	『中国人的声音』
1945	3	1	感情的貧困	『中国人的声音』
1945	3		左派趣味	『苦竹』3期
1945	3		中国文明与世界文藝復興	『苦竹』3期
1945	6		張愛玲与左派	『天地』21期
1945			組織戦時人民委員会	『大公』1期

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1945			欧戦何時結束？	『大公』2期
1945			撤兵問題	『大公』7期
1945	9		日本の解放と世界の解放——中国人の手記	『日本の解放と世界の解放』
1950	11	4	朝鮮 動乱—中共、朝鮮動乱に介入 胡蘭成特別寄稿	『毎日新聞』
1951	1	1	アジア—東西陣営アジアで対立 胡蘭成氏特別寄稿	『毎日新聞』
1951	3		毛沢東論	『改造』32巻4号
1951	6		中国人は中共をどうみる	『東洋経済新報』2475号
1951	6		アジアと日本—承前	『東洋経済新報』2476号
1951	6		日本への提言—スイスとなるより第二のトルコとなれ	『毎日情報』6巻1号
1951	7		マッカーサー元帥に呈す—特にアジアに対する認識について	『毎日情報』6巻7号
1952	6		新緑に寄せて	『共通の広場』1巻2号
1952	8		中国のこころ—戦時中の日華和平運動について	『文藝春秋』30巻11号
1952	8		わが日共観	『日本及日本人』3巻10号
1952	12		日本の風物	『改造』33巻18号
1953	1	1	中国—中共のねらうもの	『毎日新聞』
1953	2	10	日本の大道 (1)	『東三新聞』(執筆は1951年)
1953	2	11	日本の大道 (2)	『東三新聞』
1953	2	12	日本の大道 (3)	『東三新聞』
1953	2	13	日本の大道 (4)	『東三新聞』
1953	2	14	日本の大道 (5)	『東三新聞』
1953	2	15	日本の大道 (6)	『東三新聞』
1953	2	16	日本の大道 (7)	『東三新聞』
1953	2	17	日本の大道 (8)	『東三新聞』
1953	2	18	日本の大道 (9)	『東三新聞』
1953	2	19	日本の大道 (10)	『東三新聞』
1953	2	20	日本の大道 (11)	『東三新聞』
1953	2	21	日本の大道 (12)	『東三新聞』
1953	2	22	日本の大道 (13)	『東三新聞』
1953	2	23	日本の大道 (14)	『東三新聞』
1953	2	24	日本の大道 (15)	『東三新聞』
1953	2	25	日本の大道 (16)	『東三新聞』
1953	2	26	日本の大道 (17)	『東三新聞』
1953	2	27	日本の大道 (18)	『東三新聞』
1953	2	28	日本の大道 (19)	『東三新聞』
1953	3	1	日本の大道 (終)	『東三新聞』
1955	6		中国人如是説	『綜合文化』1巻2号
1955	7		中国人如是説	『綜合文化』1巻3号
1955	8		中国人として	『師と友』7巻8号
1956	7		対談 さまざまな英雄—今日の現実と新人間像	『亜細亜』4巻3号
1956	9		ソ連外交は成功したか	『亜細亜』4巻4号
1957	6	1	筆談	『風報』(第4次)4巻6号
1957	7	1	筆談 (続)	『風報』(第4次)4巻7号

209 戦前戦後を越える思想

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1957	8		毛沢東の二月演説と中国の国情	『日本談義』1957年8月号
1958	11		蘇書—蘇峰翁の書	『日本談義』1958年11月号
1959	7		人民公社と中国伝統思想	『大陸問題』8巻7号
1960	2		東洋の政治思想と民主々義	『亜細亜』28号
1960	9		気概を失った日本の民族	『経済往来』12巻9号
1960	12		中ソ論争と中共の現実—胡蘭成氏の政治レポート	『亜細亜』33号
1961	1		米新政権と国際情勢—胡蘭成氏の政治レポート	『亜細亜』34号
1961	2		中国対等の方向—中共の九中全会招集について	『亜細亜』35号
1961	5		天下の大老	『喜寿 紫垣隆翁』
1961	6	1	略介『植物的法則与人』	『人生』(香港)
1961	7		知味は知音の如し	『中国菜』3号
1961	8		中共国連加盟に関する後継国家方式批判	『師と友』13巻8号
1961			注目される台湾海峡状況—政治レポート	『亜細亜』36号
1961	9	1	論語随喜 (29)	『ジャーナル』
1961	9	11	論語随喜 (30)	『ジャーナル』
1961	9	21	論語随喜 (31)	『ジャーナル』
1961	10	1	論語随喜 (32)	『ジャーナル』
1961	10	11	論語随喜 (33)	『ジャーナル』
1961	10	21	論語随喜 (34)	『ジャーナル』
1961	11	1	論語随喜 (35)	『ジャーナル』
1961	11	1	世界の危機に曝される世界 米国、反転して強気に	『ジャーナル』
1961	11	11	中国の民心と蒋介石 期待はいまだ薄れず	『ジャーナル』
1961	12	11	天下篇 (1)	『ジャーナル』
1961	12	21	天下篇 (2)	『ジャーナル』
1962	1	1	天下篇 (3)	『ジャーナル』
1962	1	11	天下篇 (4)	『ジャーナル』
1962	1	21	天下篇 (5)	『ジャーナル』
1962	2	1	天下篇 (6)	『ジャーナル』
1962	2	11	天下篇 (7)	『ジャーナル』
1962	2	21	天下篇 (8)	『ジャーナル』
1962	3	1	天下篇 (9)	『ジャーナル』
1962	3	11	天下篇 (10)	『ジャーナル』
1962	3	21	天下篇 (11)	『ジャーナル』
1962	4	1	天下篇 (12)	『ジャーナル』
1962	4	11	世界の転機は中国に在る (1)	『ジャーナル』
1962	4	21	世界の転機は中国に在る (2)	『ジャーナル』
1962	5	1	世界の転機は中国に在る (3)	『ジャーナル』
1962	5	11	世界の転機は中国に在る (4)	『ジャーナル』
1962	5	15	観世音菩薩の靈驗 信仰の本質は「幸」生命力はどこから来る？	『仏教タイムス』
1962	5	21	世界の転機は中国に在る (5)	『ジャーナル』
1962	6	1	世界の転機は中国に在る (6)	『ジャーナル』
1962	6	11	世界の転機は中国に在る (7)	『ジャーナル』

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1962	6	21	世界の転機は中国に在る (8)	『ジャーナル』
1962	7	1	世界の転機は中国に在る (9)	『ジャーナル』
1962	7	11	世界の転機は中国に在る (10)	『ジャーナル』
1962	7	21	世界の転機は中国に在る (11)	『ジャーナル』
1962	8	1	世界の転機は中国に在る (12)	『ジャーナル』
1962	8	11	世界の転機は中国に在る (13)	『ジャーナル』
1962	8	21	世界の転機は中国に在る (14)	『ジャーナル』
1962	8		当代の大儒、馬一浮	『師と友』14 巻 8 号
1962	9	1	世界の転機は中国に在る (15)	『ジャーナル』
1962	9	1	銷夏試筆	『人生』(香港)
1962	9	11	世界の転機は中国に在る (16)	『ジャーナル』
1962	9	21	世界の転機は中国に在る (17)	『ジャーナル』
1962	10	1	世界の転機は中国に在る (18)	『ジャーナル』
1962	10	11	世界の転機は中国に在る (19)	『ジャーナル』
1962	10	21	世界の転機は中国に在る (20)	『ジャーナル』
1962	11	1	世界の転機は中国に在る (完)	『ジャーナル』
1962	11	11	患難を共にせる故人一谷正之先生の死を弔う	『ジャーナル』
1962	11	21	国際的混乱の製造—フルシチョフの制裁が見たもの	『ジャーナル』
1962	12	21	日本・中国・そしてインド—政治と産業の分かれ目	『ジャーナル』
1963	1	1	歴史の新しき出発—今や何ら新意なし 思想的疲労を癒すものは何か	『ジャーナル』
1963	1	11	時代的中心課題なき日本—眠れる“民族の魂”	『ジャーナル』
1963	1	21	困難の度を増す中共—毛沢東は今年失脚するか	『ジャーナル』
1963	1	21	早春隨筆	『ジャーナル』
1963	2	11	英国の ECC 加盟失敗—その後に來たるもの	『ジャーナル』
1963	2	21	日本は米国をどう見るか—あまりに甘い考え	『ジャーナル』
1963	3	1	日本は新市場を創造せよ—苦難が増大する競争	『ジャーナル』
1963	3	21	重大な情勢にある日本—日・中・印の共同体	『ジャーナル』
1963	4	1	国際緊張の隙間と日本	『ジャーナル』
1963	4	21	米国の空想な対外活動	『ジャーナル』
1963	5	1	改憲閑話 深い真の反省が必要	『ジャーナル』
1963	5	11	東西の連結点・ラオス	『ジャーナル』
1963	5	21	陶希聖氏を囲んで今日の中国を語る	『ジャーナル』
1963	5	21	わたしはこう見る 待つは一瞬の機微 大陸反攻はすでに必至	『ジャーナル』
1963	6	1	中国の兵機と日本の政情 日中両国とも怠慢	『ジャーナル』
1963	6	11	まず日・華・印三国の団結を新しい形勢の創造	『ジャーナル』
1963	6	21	政治家の意思と歴史の意思	『ジャーナル』
1963	7	1	日本を動かす「商人の政治」	『ジャーナル』
1963	7	11	毛・フの抗争を超える成敗ともに苦しい懷ろ	『ジャーナル』
1963	7	21	崩れゆくソ連の対米均衡 平和共存も不安定	『ジャーナル』
1963	8	1	八方壁だらけの世界経済 末期の様相深まる	『ジャーナル』
1963	8	11	幕合いに入る国際交渉 目の離せない中共	『ジャーナル』

211 戦前戦後を越える思想

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1963	8	21	いまの日本は何を求めるか 行き詰る世界歴史	『ジャーナル』
1963	9	1	自覚なき日中両国の政治家 資格なき平和論議	『ジャーナル』
1963	9	11	経済的逆手 ここに日本の活きる道	『ジャーナル』
1963	9	21	失敗を繰返す米外交 民主化をあせり過ぎ	『ジャーナル』
1963	10	1	問題の重要性軽視 大国の見識何処にかある	『ジャーナル』
1963	10	11	譲歩を示すフルシチョフ 断交の危険恐れる	『ジャーナル』
1963	10	21	大陸反攻を叫ぶ国府の真意 今秋決行は一応延期へ	『ジャーナル』
1963	11	1	東南アジアと日本 依然たる疑惧の眼	『ジャーナル』
1963	11	21	周鴻慶の亡命事件に想う 愚かな小手先外交	『ジャーナル』
1963	12	1	アジアの進路は自力で開かれる	『ジャーナル』
1963	12	11	非命にたおれた二人の指導者 ケネディとジンジェムを並吊する	『ジャーナル』
1964	1	1	私の志業報告書 今こそ反省のとき	『ジャーナル』
1964	2	1	国府にも中共にも危険な年 反省の色なき日本	『ジャーナル』
1964	3	11	ああ、わが友尾崎士郎 日本的無邪と清純さ	『ジャーナル』
1964	3	21	日華外交は決着不可能 無外交五十年の日本	『ジャーナル』
1964	3	21	ああ、わが友尾崎士郎 (その二)	『ジャーナル』
1964	4	1	大平外相に訪台を勧める 欲しい風骨と功績	『ジャーナル』
1964	4	1	ああ、わが友尾崎士郎 (その三)	『ジャーナル』
1964	4	21	民意即政治にあらず 寂寞たるかな世事	『ジャーナル』
1964	5	1	中共と国府と世界の危機	『ジャーナル』
1964	5	11	揺れる世界の現状と反発 萎縮した米国精神	『ジャーナル』
1964	5	21	『汪精衛遺囑』に想う 誠実な反省が必要	『ジャーナル』
1964	6	1	あまりにも不覚な日本 魂を喪える政治家	『ジャーナル』
1964	6	11	アジアの先覚ネールを悼む 純情と道義の生涯	『ジャーナル』
1964	6	21	憂うべき日本の政局 巧みな中共の介入	『ジャーナル』
1964	7	1	大平外相訪華の意義 心構えと態度に欠ける日本政府	『ジャーナル』
1964	7	11	東南アジアの軍事的危機 米の措置は応急策	『ジャーナル』
1964	7	21	英断を欠く米国の政策 東南アは非常事態	『ジャーナル』
1964	8	1	反省篇 (1)	『ジャーナル』
1964	8	11	反省篇 (2)	『ジャーナル』
1964	8	21	愚かしき米国の東南ア政策 最も低劣な膺懲策	『ジャーナル』
1964	9	5	国府論 革命退潮期の中国	『ジャーナル』
1964	10	5	易経探勝	『ジャーナル』
1964	10	15	易経探勝 (第2回)	『ジャーナル』
1964	10	25	易経探勝 (第3回)	『ジャーナル』
1964	11	5	易経探勝 (第4回)	『ジャーナル』
1964	11	25	易経探勝 (第5回)	『ジャーナル』
1964	12	5	易経探勝 (第6回)	『ジャーナル』
1964	12	15	易経探勝 (第7回)	『ジャーナル』
1964	12	25	易経探勝 (第8回)	『ジャーナル』
1965	1	5	易経探勝 (第9回)	『ジャーナル』
1965	1	15	易経探勝 (第10回)	『ジャーナル』

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1965	2	5	佐藤路線の正体 米・中間の橋渡し	『ジャーナル』
1965	2	15	易経探勝 (第 11 回)	『ジャーナル』
1965	2	25	易経探勝 (第 12 回)	『ジャーナル』
1965	3	5	易経探勝 (第 13 回)	『ジャーナル』
1965	3	15	易経探勝 (第 14 回)	『ジャーナル』
1965	3	25	易経探勝 (第 15 回)	『ジャーナル』
1965	4	5	テラー大使の誤信 この夏が最大の危機	『ジャーナル』
1965	4	15	易経探勝 (第 16 回)	『ジャーナル』
1965	4	25	日本のベトナム調停問題 果して成算ありや	『ジャーナル』
1965	5	5	ベトナム戦争は拡大する 何ら覚悟なき外交	『ジャーナル』
1965	5	15	易経探勝 (第 17 回)	『ジャーナル』
1965	5	25	現下の政治的覚悟 日米両国の相似点	『ジャーナル』
1965	6	5	ゲリラの平定は可能か アメリカの対ベトナム新戦略	『ジャーナル』
1965	6	15	容易ならぬ日本の事情 一大行動あるのみ	『ジャーナル』
1965	6	25	日本政財界の国際的感覚 弥縫手段は無意味	『ジャーナル』
1965	7	5	日本を毒する現代の三悪 自国の命運に無関心	『ジャーナル』
1965	7	15	ベトナム戦争主客の勢い 切れぬ中ソの腐れ縁	『ジャーナル』
1965	7	21	自制力を養成	『教育日本新聞』
1965	7	25	日本の現状と改革 強人あって大人なし	『ジャーナル』
1965	7	25	内外の世論と闘う 重大試練に直面したジョンソン米大統領	『ジャーナル』
1965	8	5	政治の実感と強み 岩淵先生と語る “日本の現状”	『ジャーナル』
1965	8	15	政治経済改革の新工夫 空前の頹廃と無責任	『ジャーナル』
1965	8	25	指導性なき日本の政治 朝野に横行する錯覚	『ジャーナル』
1965	9	5	日本を診断する	『ジャーナル』
1965	9	15	ベトナム戦争の “真実性” 日本にも一つの転機	『ジャーナル』
1965	9	25	印パ戦争は中共の新手段 事態はきわめて重大	『ジャーナル』
1965	10	5	現代日本の教育を憂う (一) 人を蝕む福祉国家	『ジャーナル』
1965	10	15	現代日本の教育を憂う (二) 東洋的伝統の自覚	『ジャーナル』
1965	10	5	時勢と天意 現状保持は至難の業	『ジャーナル』
1965	11	15	孫文百年祭	『ジャーナル』
1965	11	15	道徳教科書の執筆を決意	『ジャーナル』
1965	11	25	時代の新機 国民いまや総不良化	『ジャーナル』
1965	12	5	今日における志士の業 道徳、英知の総崩れ	『ジャーナル』
1965	12	15	芽 この新しい時代を生むもの 歴史と工場の煤煙	『ジャーナル』
1965	12	21	昔中国六芸の教 文明は功利主義を超越する	『教育日本新聞』
1966	1	1	年始禊文 容赦なき歴史のあと 保田氏の「風景と歴史」の読み方	『ジャーナル』
1966	1	1	文章経国の大業	『教育日本新聞』
1966	1	15	白馬啓運	『ジャーナル』
1966	1	25	政治的器用さと見識 期待できぬ明朗化	『ジャーナル』
1966	2	5	ベトナム戦争の史的角 度 気概あって徳なき中共	『ジャーナル』
1966	2	15	中共問題の解答 (1) 元首と権力者の座	『ジャーナル』

213 戦前戦後を越える思想

年	月	日	論文名	掲載誌／紙
1966	2	25	中共問題の解答 (2) 情操を喪える中国人	『ジャーナル』
1966	3	1	清平世界 春の香りと紀元節	『教育日本新聞』
1966	3	5	中共問題の解答 (3) 毛沢東の感想と決心	『ジャーナル』
1966	3	15	中共問題の解答 (4) 対日方針に連合戦線	『ジャーナル』
1966	3	25	般若心経を説く (1)	『ジャーナル』
1966	4	5	般若心経を説く (2)	『ジャーナル』
1966	4	15	般若心経を説く (3)	『ジャーナル』
1966	4	25	般若心経を説く (4)	『ジャーナル』
1966	5	5	般若心経を説く (5)	『ジャーナル』
1966	5	15	般若心経を説く (6)	『ジャーナル』
1966	5	25	般若心経を説く (7)	『ジャーナル』
1966	6	5	般若心経を説く (8)	『ジャーナル』
1966	6	11	日光東照宮観画記 悩みを吹き払ふ“善竜”「鳴竜」に 取組む堅山南風先生	『教育日本新聞』
1966	6	15	般若心経を説く (9)	『ジャーナル』
1966	6	25	般若心経を説く (10)	『ジャーナル』
1966	9	21	朋有り遠方より来る 唐君毅先生のこと	『教育日本新聞』
1967	3		民族の文明と食物	『中国菜』7号
1967	11	8	閔世記 (32) ～ (34)	『ジャーナル』
1967	11	28	閔世記 (35) ～ (37)	『ジャーナル』
1968	1	8	戊申迎歳	『ジャーナル』
1968	2	18	ベトナム戦の激化	『ジャーナル』
1968	6	8	「岩淵辰雄選集」に学ぶ 喪われた国民士気	『ジャーナル』
1970	10	29	哀悼三島由紀夫	『新聞天地』週刊